

ハ決て無之處僧分に於て妄に復飾の儀願出候者往々有之
 不謂事は候若も他の技藝有之國に益する儀をて還俗致度
 事は候得ハ其能御取調の上御聞届も可有之候得共佛前に
 て蓄髮致し候儀ハ不相成候間心得違無之様御沙汰候事
 〔太政官〕御布告 九月十八日
 今般御即位御大禮被為濟改元被仰出候に付てハ天下の罪
 人當九月八日迄の犯事逆罪故殺並犯狀難差死者を除の外
 都て減一等被赦候事
 但犯狀難差死者ハ府藩縣より口書を以て刑法官へ可伺
 出事

〔行政官〕御達 同日
 來廿一日休日より無之廿二日休日の事
 但以後一六の日休日の事
 〔鎮將府〕御沙汰 同日
 一京中へ相掛り候金銀調達の儀總て東京府より取扱可申
 候事
 一會計官在金拂底の節ハ議政官へ其旨申立候ハハ議事の
 上鎮將府より東京府へ御沙汰可有之事
 一京中土地是迄御藥園其外植物地等總て東京府へ相任せ
 但租稅の儀御定の通の事
 年々會計官へ可相納の事

一生系種紙税法の儀東京府よて取扱右税銀會計へ納可申事

一市中酒造税の儀同斷の事

一京中一切の租税東京府よて微細よ取調會計官へ可相達
の事 但し取納期限規則の事

右の通向后御定よ相成候旨御沙汰候事

〔太政官〕御布告 九月十九日

議政行政の分別を以て議事の制可被爲立筈の處自然實狀
よ於て議政亦行政の事と相成立法官行政官を相兼候様成
行遂よ議事の制難相立候然よ今後天下衆庶と共よ衆庶の

政を爲し且會計の事よ於ても愈議事の制より生じ候様無
之ての難被相行實よ皇國御基本も此事の成否よ關係致候
依て當時實狀よ隨て姑く議政官を被廢議參兩職并よ史官
共其儘を以て行政官入り輔相の次よ列し職務如舊決定機
務を旨とし可相勤候且別よ議事の制取調候局を開き大よ
右制御興立可有之様被仰出候事

但姑く議政官を被廢候得共即時政體書御變革よの不相
成候間本文の次第官中のみ相心得天下一體の儀の追々
議事の制相立候上被仰出候事

〔同 官〕御沙汰 同日

高野山

學侶方

行人方

非事吏方

今般右三派の名目を廢し金剛峯寺の舊號を復し候様被仰
出候間一山協和總て是迄學侶よて定置候規則の通可相守

事 一山寺務總職の儀ハ金剛峯寺當住へ改て被仰付候事

但青巖寺を以て金剛峯寺と改號可致事

門主碩學ハ一山の議定たるより集議二十人中より撰

擧可致尤三十人入寺以上の衆徒より公議入札の上可定事
右の條々御一新の御旨趣を奉戴し抽丹誠可致精勤旨更
御沙汰候事

太政官御達 九月十九日

東京行幸

御出輩來二十日御治定の事

同官御沙汰 同日

來る廿二日より府内社寺諸願届等總て東京府へ可差出
旨御沙汰候事

府内社寺の儀別紙の通御沙汰相成候就てハ府外の儀も豫

て御布告相成居候通相心得來る十月朔日より諸願等其所部の府藩縣へ指出可申候事

但勅祭の大神等直に鎮將府へ願書等指出候向も一往其所部の府藩縣へ申達添簡を請候上可差出專

（太政官）御達 九月十九日

伊豆相摸其外へ宮公卿等の名目もて鎌倉五山其外より民間に貸附金相成居候を元利取立候向有之趣も候處當春以來兵事天役並水損等もて百姓共必死難澁不忍見折柄右様の事有之此末流離亡散も立至候ての不容易次第も付退て御沙汰候迄利銀たりとも取立候儀總て不相成候事

但僧侶の就中慈悲施惠を旨主と致候者も候處當年柄民生を苦め候ての別て不相濟儀も付心得違無之様配下末々も至迄急度可相達事

（同）官）御沙汰 同月廿日

先般以來徳川舊臣共御扶助相願候者御採用被爲在候も付同家重役共へ取調可申出猶又銘々直さよ可願出旨懇も御沙汰相成候處今以方向取失或の一時邪論を主張して奉命不致今日も至り自己の活計も差支候より追々願出候者も有之趣際限も無之而已あらむ右様心得違の者不埒の至も付御奉公願出候者來る廿五日限たるべく其以後願出候者

一切御採用無之旨御沙汰候事

〔太政官〕御布告 九月廿日

各國公使横濱在留_ニ付今般御東幸中外國官の儀の知事始
總て供奉被仰付外國事務御取扱_ニ相成候條行在中其筋の
一切東京へ可伺出事

大坂 兵庫 長崎 箱館 新潟

右等居留地へ至急_ニ布告可有之事

〔同 官〕御沙汰 同日

神奈川府

今般其府を縣と被改_レ候旨被仰出候事

〔同 官〕御沙汰 同月廿一日

越後府

今般其府新濤府と被稱_レ候旨被仰出候事

〔東京府〕御觸 同月

今般市中取締の儀諸藩隊長へ被仰付夫々持場を定め候へ
共右の強盜又_ニ市中へ潛伏致し候もの御取締めて市政よ
關係致し候儀_ニ無之候間公事訴訟の勿論檢使見分其外
諸訴共都て是迄の通相心得可申候
右の通組々并番外迄不洩_レ様早々可申通

〔同 府〕御觸 同月

來廿二日天皇御誕辰に付毎歲群臣は醜宴を賜り天下の刑戮を被停庶民と御慶福を共被遊候思召の旨被仰出候も付同日の工商共其業を相休御嘉節を奉祝候様可致旨名主共支配限不渡様可申聞
右の趣組々并番外迄早々可申通

〔行政官〕御沙汰 九月廿三日

御東幸御留守中も付玄猪の御祝當年は不被下候事

〔同 官〕御達 同日

今般御東幸も付てり兼て御布告の通金銀紙幣取交通用勿論の儀も候得共遐邑僻境も於てり未相辨向も可有之候

間御領の府縣私領の領主地頭より不渡様早々可相觸候事

〔太政官〕御布告 同月廿四日

來る廿六日白峯宮御祭典被爲執行候も付當日辰刻より申刻迄宮堂上諸侯諸官人參拜可爲勝手事

但御宮詰の者へ申出神供頂戴可致事

諸人參拜並諸家獻物祿免候事

但御宮詰の者へ夫々可示合事

〔同 官〕御布告 同日

一郭中屋敷の家作ども被召上候事

一郭外屋敷地の被召上家作の儀は出格御慈悲の思食を以

被下候事

右先達て相觸候内書面二廉の徳川家臣へ申達し候儀よて
列藩關係無之候よ付爲心得尙相達置候事

〔太政官〕御布告 九月廿四日

一大小藩共郭内よて屋舖一箇所宛

一郭外の十萬石以上二ヶ所其以下萬石迄一ヶ所宛

右書面の通此度被下候事

但是迄受領屋舖引續拜領相願候向の郭外計よても勝手
次第たるべく候尤南の芝口川通り東の大川端通り郭内
と相心得可申事

〔同 官〕御沙汰 同日

今般御東幸よ付諸藩公議人の内一國一人宛東京へ可差越
被仰出置候所御都合も有之よ付當時詰合候公議人何れも
海陸勝手次第 御着葦前後東京へ可差越旨改て被仰出候
尤病氣等よて難差越向の別段の儀よ付其旨可伺出候事
但有よ付過日相達置候明廿五日公議人飛鳥井家へ出頭
不及其儀候事

〔同 官〕御沙汰 同月廿五日

軍務官

其官裁判所御用掛の兩局自今被廢候事

〔太政官〕御布告 九月廿六日

先帝御忌日は是迄御發喪日を以て十二月廿九日と被爲定置候處今般御制度復古の折柄第一御追孝の思召よて古禮も被爲基以來崩御御正忌の通り十二月廿五日も被爲定一段恭敬至重も御祭典可被爲遊旨被仰出候事
但過日被仰出候分ハ御取消の事

〔行政官〕御達 同日

神祇官是迄野々宮家を被用候處今十七日より元學習院へ被移候仍爲心得相達候事

〔太政官〕御沙汰 九月廿七日 各通

薩州 土州 紀州

今度海岸要所へ燈明臺築造被仰付候も付地所爲可相撰英國器械匠一人長谷川三郎兵衛同伴火船よて其地へ見分も被差立候も付着船の上ハ萬端不都合無之様可取計事
但不日横濱出帆よて大坂着船の上直も發向相成候事

〔同官〕御沙汰 同月廿七日

新潟府

越後國三島古志蒲原沼垂巖船の五郡其府よ於て管轄候様

被仰付候事

〔太政官〕御達

九月廿七日

近來諸川々又ハ郊外ニ於テ猥リ又鳥打致シ候趣當節農事
繁多の時節農民共別テ難澁の旨申出候兼テ御沙汰の次第
も有之處甚不持の至向後取締の者差出し候間爲心得此段
申達候事

〔同 官〕御沙汰

同 月

伊 那 縣

信濃國佐久郡御影ハ以來其縣にて管轄致候様被仰付候事

〔鎮將府〕御沙汰 同 月

近來於諸藩猥又外國船相雇東京へ相廻シ兵隊等爲乗組或
ハ未開港場へ罷越候哉又相聞過去候儀ハ致方無之候得共
以來總テ神奈川府へ願出共指押を受取計候様御沙汰候事

〔鎮將府〕御沙汰 九 月

御着麓御當日奉迎場所

議定 以上

坂下御門外北側

四等五等官

和田倉御門外北側

無役諸侯

坂下御門外南側

但當日不及登城翌日己の剋登城可伺天機且供奉の外
兵隊召連候儀被差止候間御定式の外供連不相成候事

右の通御治定相成候條混雜不致様可相心得旨御沙汰候事

關宿藩

下館藩

館林藩

〔鎮將府〕御沙汰 同 月

結城藩

古河藩

忍藩

今般下総銚子へ漂着致候徳川藩脱艦乗組の賊徒共此程上陸及既も常州土浦表へ罷越候も付同藩より直も人数差

出五十人余捕縛致候得共尙殘賊総野の間を横行可致の模様も付其藩々領内へ立入候哉も難計嚴重取締追捕方油斷無之様可致旨御沙汰候事
前件の通御沙汰も相成候間迅速廻達可致候事

〔同 府〕御沙汰 同 月

先般已來徳川旗下其外諸藩脱籍の徒官軍も抗衡致戦争候者不少候處伏罪の上へ被處寛典候然る處下情兎角悻慢今以脱走屯集等致し候段重々不屈の至も候此上へ御仁恤の道も被爲絶候も付向後脱走屯集の輩於有之へ士官張本の不及申夫卒も到迄総て可被處嚴科旨御沙汰候事

右の通今般御治定相成候條爲心得申達置候事

〔東京府〕町觸

九月廿七日

品川十八寺門前より
吳服橋御門まで

町々名主共

近々東京へ行幸し付御道筋町々取締向心得方左の通

一御道筋町々横町切場所其外御見通長き所より不宜所

の見計竹矢來竹木戸補理可申候

但し喰違明き場其所の道幅も寄候へ共乘懸馬通

候程八九尺程の明きよて板木戸仕付并竹矢來木戸共

右同斷取付可申候

一御道筋町々盛砂可致候

一御到着夜分又候ハ御道筋町々兩側町家軒下へ提灯爲

差出可申候

一御道筋町家の内明き地場の所板圍いたし其外御見通も

ても見苦敷所より不宜所の板圍又ハ菱竹等よて見計手

輕よかこひ可致候

一御道筋町々名主麻上下家主共羽折袴着可罷出候

一御到着の節御通行町々往來人爲差留候ハ不及候へ共

差懸男女とも土間よ平伏爲致可申候

一御道筋湯屋豆腐屋菓子屋味噌屋蕎麥屋温飴屋鍛冶屋の

類都て大火焚候者の御當日相休可申候

一御道筋往還掃除入念申付目立候の時々為水打可申候

一御道筋町屋二階の戸締可申候

但目張も不及候

一並手桶表の軒數も應じ差出可申候

一町々水溜桶損じ候分早々仕直し水不絶様汲入置且町銘

の札并も裏井戸有之路次へ目印損じ候分早々仕直し可

申候

一溜人足置場の儀町々申合最寄へ為詰置候様可致候

一出火有之候の御定の詰場へ溜人足半分差出半分町

内へ残し置町役人共相連町内時々相廻可申候

一溜人足法皮等在來を用ひ物入不懸様可致候

同府

九月

近々東京へ行幸も付ての町々火の元の儀別て入念火の見

番火消人足共平常の通相心得萬一出火有之候の早々人

數駆集消留の手筈等兼て申合可置候

一町々役人共申合町内裏も迄見廻り火の元厚心付若怪敷

もの見當り候の捕押召連可訴出候

一御到着御當日も御通行御道筋も無之分の渡世相止

も不及候得共火の用心大切も可致候

右の通所々不洩様可相觸候

〔太政官〕御達 十月朔日

來る八日より左の通御規則被改候

親王 二重橋外

一等官 中仕切御門外 御裏御門外

二等官 大手橋外 坂下御門外

三等官 公卿諸侯 公卿諸侯

四等官以下 下馬札 四等官以下 下馬札

右の場所にて可爲下馬下乗候事

〔驛遞司〕御布告 同日

一 京都傳馬御用所御取建相成候迄三條通大宮西へ入三寶寺を以て假傳馬所と相定候事

但十月三日より取開候事

一人馬の儀の御用通行出兵等よかざり都て當司へ添簡を以て指出し其餘諸藩發京私用の分等一切指出し申す間敷事

一 諸官司初人馬入用の節の前以當司へ申入置當日其向々より請取として小者一人假傳馬所より銘々邸宅へ繰込候儀の致間敷事

一 諸官司より致差出候御用狀諸荷物自今傳馬所に於て取扱可申事

尤當司より掛の者一人宛出役立合爲取扱候事

一 宿駕籠等一切差出申間敷萬一早退等よて買上げ被申入

候ハ世話可致事

一 宮堂上方平生遣人夫各不同有之候へ共都て領地高百石

又付一箇年十人遣の割合御定相成候又付其分申込次第

無賃よて繰入可申事

一 右人夫遣方よより宮堂上奥向の用筋よて領民不成てハ

難相叶其段前以届有之候ハ其通繰入可申方一領民繰

込方難出来候節ハ夫銀を以可相納事

一 傳馬所御定賃錢左の通申付候事

京都より大津迄

人足一人又付

六百三拾九文

本馬一匹又付

一貫貳百八拾貳文

輕尻一匹又付

八百三拾五文

京都より伏見迄

人足一人又付

五百四拾五文

本馬一匹又付

一貫五拾文

輕尻一匹又付

八百三拾五文

京都より淀迄

人足一人又付

六百拾六文

本馬一匹又付

一貫貳百貳拾五文

輕尻一匹又付

八百四文

京都より山崎迄

人足一人又付

七百一文

本馬一匹又付

一貫三百八拾六文

輕尻一匹又付

一貫五拾貳文

京都より櫻原迄

人足一人又付

三百拾貳文

本馬一匹又付

六百貳拾四文

輕尻一匹又付

四百六拾六文

右の通京都傳馬御用所規則取極取締役共へ申渡候事

〔太政官〕御布告 十月四日

一金札石高拜借御渡方運速の違よて上納方均しからせ候

又付一ヶ年一割の算當を以拜借の月より月割よて毎年

十一月限上納可致候事

但十月後拜借の分ハ翌年正月廿日限上納可致候事

一年割上納の分兼て御布告の通會計官よて破札又相成候

又付當辰年より府藩縣よ於て雛形の通印判押切上納可

致候事

黒印

年割上納

何 府 藩 縣

堅 三寸五分
横 一寸

〔太政官〕御布告 十月七日

今般厚き思召を以て世上爲融通金札通用被仰出候處間々
不心得よて彼是申難じ通用を妨げ奸曲の所行せし者有之
哉又相聞以の外の事又付府縣又於て嚴重詮議右様不心
得の者於有之の早速召捕可遂吟味候事

〔同 官〕御布告 同日

今般厚き思召を以て世上爲融通金札通用被仰出候處諸藩

の内間々未だ通用不致向も有之趣相聞へ以の外の事又候
皇國一圓通用の儀又付藩々又於ても追々相當の拜借仕
がら不通用の向有之候の全く朝命を拒み候筋又相當り候
又付向後右様不心得の向於有之の屹度御沙汰の次第も可
有之候條兼て被仰出候通正金同様令通用候様僻邑遐陬
至る迄速よ可相達旨被仰出候事

〔同 官〕御沙汰 同日

龍駕近々着御可相成よ付ての上下百官銘々自然心得も可
有之候へ共尙又一涯勵精し御宏業を宣揚候様深可相心掛
候萬一閑又相心得遊蕩怠惰風化を害し遂又更始の御大

政を奉妨候様の儀有之候て、以の外の事、付銘々、勿論
附屬家來の者共、至迄屹度申聞一統協力同心、以て奉職可
致旨御沙汰候事

〔太政官〕御布告 十月九日

惠 統 睦

右三字御諱、付名字等、相用申問布儀、勿論刻本等、
闕畫可致候事

〔同 官〕御沙汰 同月十日

府 縣

府縣、於て不虞の節臨機の取計、格別、候へ共平常諸侯

の兵隊を指揮候儀、有之間敷と被仰出候事

〔太政官〕御達 同日

度 會 府

度會府一郡の内、僅の封境神領と相成候、不罷事、候殊、
宮司以下、從來弊風、不少趣、全く神領御手續、より不都合の次
第、立至り候儀、付今度府を御取建の上、速、御改正、至
當御所置可有之、所國事御多端の折柄、故先當分の處、辰九月
より己九月迄、正米一萬石を以、被屬其府候事

〔鎮將府〕御沙汰 同日

主上此度御東幸被爲遊候儀、先般詔書を以、被仰出候、通四

海一家東西同視の思召みて未曾有の御盛典被爲舉候間上
 下一同厚く御趣意を可致體認儀の勿論の事又付假初も
 非道の威權の間敷儀且何事も不寄小民を爲惱候様の事決
 て有之間敷候忝も蒼生の疾苦を御綏撫被爲遊候御本意
 基き奉り下々も又一涯難有感戴仕其分又應じ報効可仕儀
 候間諸藩士の勿論宮公卿の附屬等又至り分て正道を主
 とし無作法の儀一切無之御盛業を宣揚仕候様主人長官よ
 りも篤と可申聞旨御沙汰候事
 一鎮將府御沙汰 十月十日

判 辨
 事 事

軍功諸藩戦士の盡賞典の儀實は國家の大事候間各見込
 の處以封事可差出候事
 一行政官御觸達 同日
 兼て古金銀歩増の儀御布告有之候處取引不融通の趣も相
 聞候又付左の分今般引替被仰出候
 一元文字金百兩又付
 引替金四百九十一兩
 一眞字二分判 百兩又付
 文政金 引替金四百二十七兩
 一朱金百兩又付

一 草字二分判百兩又付
引替金二百一十一兩

引替金三百七十六兩

一 古二朱金百兩又付

引替金二百四十一兩

一 五兩判百兩又付

引替金三百十八兩

一 天保金百兩又付

引替金三百六十八兩

一 正字金百兩又付

引替金二百九十五兩

一 安政二分判百兩又付

引替金百四十九兩

一 慶長銀

量一貫目

代金八十九兩

一 元祿銀

同

代金七十一兩三朱

一 寶永銀

同

代金五十五兩

一 永字銀

同

代金四十四兩一分

一三ツ寶銀カ 同

代金三十五兩一分

一四ツ寶銀カ 同

代金二十一兩三分二朱

銘元文めいげんぶん

一五文字目銀 同

代金五十一兩

一草文字銀 同

代金三十九兩三分

一保字銀 同

代金二十八兩二分二朱

一政字銀 同

代金十二兩三分三朱

一古二朱銀百兩

引替金百六十兩

一文政二朱銀百兩

引替金百十五兩

御一新後引替歩増おのちかごひきかへひきかへあましのぶんの分

一古一分銀百兩

引替金百七兩

右の品所持罷在候者金銀兩局并商法會所へ引替差出可申候尤古金銀差出候日限より日數廿五日過代り金の儀の定價の内書面の吹元諸雜用と引被渡下候間銘々不貯置引替差出可申候

〔太政官〕御布告 十月十三日

御東臨の節の當城を以て皇居と祕定候に付以來東京城と可稱事

〔同 官〕御布告 同日

諸願伺届等以後上包に其文面の主旨を取摘み張紙にて何

々願等相記し差出可申事

〔太政官〕御沙汰 同月十三日

徴兵其他巡邏兵等隊伍行列の規則も可有之候得共往來の節宮堂上諸侯等別て御設有之候方々行違候砌の道路半を譲り不失禮節様御沙汰候事

〔同 官〕御達 同日

當地に於て諸藩邸中火の見櫓を設候向の失火の節其邸中の合圖版木相用候儀可爲勝手事

〔同 官〕御布告 同月十四日

淨浪士の儀に付今般更に被仰渡候間右取扱方等の儀に軍

務官へ委細承り合御趣意致貫徹候様精々可取計萬一御趣
意行違候儀有之候て其藩の越度候條其心得可有之候
事

〔詔書〕

同月十七日

詔皇國一體東西同視朕今幸東府親聽內外之政汝百官有司
同心戮力以翼鴻業凡事之得失可否宜正議直諫啓沃朕心
〔詔書〕 同日

詔崇神祇重祭祀皇國大典政教基本然中世以降政道漸衰祀
典不舉遂馴致綱紀不振朕深慨之方今更始之秋新置東京親
臨視政將興祀典張綱紀以復祭政一致之道也乃以武藏國大

宮驛氷川神社爲當國鎮守親幸祭之自今以後歲遣奉幣使以
爲永例

〔太政官〕御布告

同日

今般御東幸被爲遊候よ付て祭政一致の思食を以て別紙
詔書の通武藏國大宮驛氷川神社以後當國の鎮守勅祭の社
と被爲定當月下旬行幸御參拜可被爲遊旨被仰出候事

〔同官〕御布告

同日

今般駿河以東十三國社寺の儀府藩縣よ於て取扱候よ付て
の自今方内の別當社僧復飾致し候節の姓名等相認府藩縣
より行政官へ届出可申候事

但一ヶ月分宛取纏毎月届出可申事

〔太政官〕御布告 十月十八日

東北未だ平定又不至の折柄一先鎮將府被相立候處今般御

東臨被爲遊候又付ての萬機宸斷を以被仰出候御儀又付自

今鎮將府被廢候事

〔同 官〕御沙汰 同日

會計局

今般鎮將府被廢候又付會計局被相止會計官出張所又被仰

出候事

但與頭以下諸役人の是迄の通相心得可申元評定所の儀

刑法官へ引渡被仰付候事

〔同 官〕御沙汰 同日

項妙寺 立本寺 本隆寺 妙蓮寺 本法寺 妙顯寺

妙覺寺 本満寺 本禪寺 妙傳寺 寂光寺 妙泉寺

要法寺 妙満寺 本能寺 本國寺

王政御復古更始維新の折柄神佛混淆の儀御廢止被仰出候

處於其宗の從來三十番神と稱し皇祖太神を奉始其他の神

祇を配祀し且曼陀羅と唱へ候内へ天照皇太神八幡太神等

の御神號を書加へ剩へ死體又相着せ候經帷子等も神號

を相認候事實又不謂次第又付向後禁止被仰出候間總て神

祇ぎの稱號しょうごう決けつて相混まひじ不申様まへまじ屹度きど相心得あひま宗派しゅうはい末々まご迄まで不渡様なださま
可相達旨御沙汰候事まへまじのまじりまじり

但是迄祭來候神像等まつりきたり於其宗派設候分そのまうはにたて速すみ可致せ燒却候せうさく
若もし又また由緒有之ゆいじあり往古わうこより在來ざらいの分ぶんを相祭候類まつりの夫々取調それぞれとりまづ
神祇官かみへ可伺出候まへまじり

〔太政官〕御沙汰 十月十九日

鎮將府支配

今般鎮將府被廢候こんばんちんちやうふ又付當分またたうぶん可為か行政官支配事ぎやうぎんしはいじ

但東京御駐輦中たうきやうおとどの諸事しよじ辦事べんじへ可伺出候まへまじり

〔同官〕御達 同月

今般鎮將府被廢候こんばんちんちやうふ又付てまたたて駿河そら以東いとう十三州じゆしゆうの中なか上大夫おほおと上かみ
士し以後いご諸願しよげん伺等まへまじり太政官たうせい辦事べんじへ可差出候まへまじり

但東京城御駐輦中たうきやうじやうおとどの皇居きやうきよ辦事べんじへ可差出候まへまじり

〔東京府〕御觸 同月十九日

注上ちゆうじやう御臨幸おんりんかうの折柄せりあ於東京府内たうきやうふちう無謂むご及および砲發ぱうはつ或あるの近郊きんかうよてよ獲と
鳥とりのため小銃せうじゆ打射うちいたし候者まへまじり於有之ありの見當りみあた次第だいじ早々ささ召よ
捕吟味とびんみの上かみ可處まへまじり嚴科げんか候間まへまじり内うちの勿論もちろん近郷きんかうに至いたる迄まで厚あつく相あひま
心得こころえ不渡なだ様さま可相觸まへまじり者也なり

〔行政官〕御沙汰 同月二十日

東京在留諸侯

毎月五日の小御所こごしよに臨御りんご資治通鑑しやうちつくわん聴講ちやうかう被仰付候おほせまへつけうに付東京とうきやう在留ざいりやうの諸侯しよこ極老幼ごくらうじやう若わかの外ほか有志いしの輩はい御筵ごえんに陪侍ばいしし研けん鑽せん可致かち候まう若不か審あん疑ぎ惑わく等有と之の候まうに其坐まに於おて質問あつもん商量しやうりやう不な苦く候まう就つて本月ほんげつ廿五日にふたご漢高祖かんかうそ紀きより御開業ごかいげふに相成あひな候まうに付銘めい々々書ま卷持くわんぢ參可ま有あ之の候まう事こと

但學業未熟がくげふまじく候まう共有志いしの面々めんめんに出席あつせき可致かち其志無之こゝろなし輩はいに來る廿二日迄きたるにふたごにち迄まで姓名書取調せいめいしよとりあつて差出可申事さしだせうしる

〔太政官〕御布告 十月廿三日

御一新後萬國貨幣いつしんごばんこくくわへいの鈞合けんあひを以もて並錢始浪なみせにはじめ浪錢等なみせんとう夫々それ直増ちか通行つうかう行御定かうさだめ被仰出候處おほせまへつけう其國所くにごころに於おて心得違こころえちがひの者共ものども十二文じふにもん通行つうかう

の處ところ或あるに六文むくもん或あるに八文はちもん位ゐに取引渡とりひきわたし其その準ちんに浪錢等なみせんとうに至いたる迄さだめ御定ごさだめ通用つうよう不致趣相聞おほせまへつけうへ以もつての外ほかの事ことに候まう元來もとより貨幣くわへいの儀ぎに僻地へきち遐陬げさうに至いたる迄まで一様いちやう候まうてに不相濟あひな事ことに付先達さきて金札きんさつ通用つうよう向むかふ付つても嚴重げんじやう被仰出候おほせまへつけう通府つうふ藩縣はんけんに於おて嚴重げんじやうに取調とりあつて天下てんか一圓いちえん定額ていごくの通りつうよう通用つうよう可致かち様御沙汰さまごさた候まう事こと

〔太政官〕御布告 同月廿五日

切支丹宗門きりあつたんそうもん改方かいほう追おて御規則ごきそく相立あひたち候まう迄までに舊幕府きやうまくふの處置あてちに相あ從したがひ不審ふあん成者なり有無あやふ取調とりあつて來十一月きたしふご限辨事かぎりべんじ傳達たうだん所ところへ可届出かひきだ事こと

〔同官〕御布告 同日

一宮いちのみや 御參拜ごさんはいに付つ明廿六日晚あきふたごより廿九日にふたごの朝あさに至いたり御神ごかん

齋候重輕服者僧尼參内可憚候事

但御用多端折柄候間廿六日晚より廿七日

御出替後迄服者以下參内可憚御留守中不苦候事

行政官御沙汰 十月廿五日

諸藩公議入

議事の儀先般京師に於て被仰出候通藩論を一定し大に
國家實用の公議を御興立被爲在度思食よて當節議事の制
御取調中よ有之候處今般各藩公議人を被召寄候儀に東北
畧及平定候よ付益以皇國一致朝廷列藩の間氣脈相通じ屹
度中興の御盛業被爲立度就ての遅々御下問の條件も可有

之よ付銘々至正公平の御趣意を奉體認各一藩の定論を以
可奉答旨被仰出候事

太政官御布告 同月廿七日

兼て被仰出候通大宮驛氷川神社御參拜として行幸被爲遊
今朝卯上刻東京城御發轅本郷巢鴨御小憩板橋御晝休志村
藏驛等よて御小休申下刻浦和驛御着同所御一泊翌二十八
日大宮驛御着轅神社御參拜被爲濟同驛御晝休申下刻浦和
驛へ御還替翌二十九日申の刻御都合能東京城へ還御被爲
遊候事

同官御布告 同日

今般御東巡御道筋の孝子義僕職業出精の者御褒賞七十歳
 以上の者且火災水難に罹り候者共御賑恤被仰出候依て
 皇國中無遠近前件の通御擴行被爲遊度深き竊慮も付府藩
 縣も於ても御主意奉體認其支配所領速に褒賞賑恤の道を
 施し窮民撫育等精々行届候様可取計旨御沙汰候事

〔太政官〕御布告

十月廿八日

天下地方府藩縣の三治も歸し三治一致もして御國體可相
 立然るも藩治の儀も従前各其家の立るも隨以職制區々異
 同有之候も付今後一般同軌の御趣意を以て藩治職制大凡
 別紙の通可相立旨被仰出候事

藩治職制

執政無定員

- 一 制札の其藩より揭示の事
- 一 村々役人進退共都て其藩もて可取計事
- 一 宗門人別帳の村々より直も其藩へ可差出事
- 一 年貢の儀の年々其藩も於て取極可相違事
- 一 村々へ夫役用金等地頭より勝手も申付間敷事
- 右の外政務も關係致し候儀の悉皆藩々於て指揮可致至府
 藩縣同一治の御趣意奉體認彼我の別無く可取扱旨御沙汰
 候事

掌體認朝政ちやうたいにんてい輔佐藩主ほしやくはんしゆ一番紀綱政事いつぱんきかうせいじ無不總むふつそう

參政無定員さんせいむていゐん

掌參政事ちやうさんせいじ一藩庶務いつぱんしよむ無不與聞むふつよもん

公議人こうぎにん

掌奉承朝命ちやうほうじやうていめい代國論備議員たいこくろんびいぎいん

一執政參政いちしやくせいさんせいの藩主はんしゆの所任しよにんと雖いえども從來ちやうらい沿襲えんじゆくの門閥もんぼつ不拘くわいほう人にん材登庸さいとうよう務むて公舉こうきよを旨むねとし其人員そのにんじん黜陟ちつしつ等時とうじ々々太政官たいていこう又達またうすべし

一執政參政いちしやくせいさんせいの外兵げへい刑民事けいみんじ及庶務おほひなむの職制しやくせい其藩主そのはんしゆの所定しよていと雖いえども大凡おほほん府縣ふけん簡易かんいの制せい又准おほんと一致いつちの理りを明あきらますべし

但職制たつしやくせい一定いつていの上うへの之これを册さうとして太政官たいていこう又達またうすべし
一藩主はんしゆの側かたはら從來ちやうらい所置しよちやく用人よじん等の職しやくを廢はいし別べつ又家知事かちじを置おき敢あて藩屏はんぺいの機務きむ又混こんせしめ専まら内家ないかの事ことを掌つかさらしむべし
一公議人こうぎにんの執政參政しやくせいさんせい中ちゆうより出い出すべし
一大おほひな又議事ぎじの制せいを立たてらるべき又付藩おほひな々々又於おほひなても各其制おほひなを立たすべし

（行政官）御達

十月

東京府

今般御東幸こんぱんごとうきやう又付東京市またうとうきやうし中一同ちゆういつどうへ御酒下賜ごしゆくたみ候まは間夫々まはま分配ぶんぱい可べ

取計候事

〔東京府〕御觸

十月十八日

一 今般御東京幸ふ付東京市中一同へ御酒下し賜候間來月五日六日七日市中一同家業相休頂戴可致候事

但御酒の來月四日當府に於て分配候間市中名主共麻上下着用町々總代の者壹人宛召連朝五ツ時可罷出候事

〔太政官〕御布告

同月廿九日

王政復古凡百の事追々御改正に相成就中刑律の兆民生死の所係速に御釐正可被爲在の處春來兵馬倥傯國事多端未

た釐正に暇あらざ依之新律御布令迄の故幕府へ御委任の刑律に仍り其中磔刑の君父を弑するの大逆に限り其他重罪及焚刑の梟首に換へ追放所掃の徒刑に換へ流刑の蝦夷地に限り且盜竊百兩以下罪不至死候様畧御決定に相成候尤死刑の勅裁を経候條府藩縣共刑法官へ可伺出且總て粗忽の刑罰有之間敷候事

一 流刑の蝦夷地に限り候得共彼地御制度相立候迄の先舊に仍り取計置可申事

一 徒刑の土地の便宜より各制を可立事に付府藩縣共其見込に從ひ當分取計置可申追々御布令可被爲在候事

右の通被仰出候條御旨趣堅く相守猶不決の廉有之候ハ
刑法官へ可伺出候事

〔太政官〕御沙汰 十月廿九日

中大夫以下の面々東京定府に被仰付候間當時歸邑の輩ハ
早々出府可致様御沙汰候事

但邸宅の儀ハ如舊被下候間早々可願出事

〔同 官〕御沙汰 同日

甲斐府

今般其府御取建に付てハ甲斐國諸縣被廢御領一圓其府可
爲管轄旨被仰出候事

但甲府城を以て府廳に可致事

〔同 官〕御布告 同 月

今般御親臨被爲在候に付西城を奉稱行宮并群臣登城出仕
等參仕參内と可稱旨被仰出候事

〔同 官〕御布告 同 月

鐵砲洲居留地關門外の地所又ハ家作等外國人へ貸渡の儀
一切不相成事に付心得違致間敷旨相觸置候得共若内々
にて相背貸渡し候者有之候てハ以の外の事は付假令外國
人より相對を以て相望候共相斷其段早速可訴出若等閑に

致し置候歟又ハ觸面の趣相背候者於有之ハ吟味の上嚴重
可申付候間右の趣居留地最寄ハ勿論町々不洩様早々可申
通候事

〔同 官〕御沙汰 同 月

今般非常の聖斷を以て御東幸既ニ御着輦ニ相成候處東北
畧及平定御満足被思食候得共前途内外の形勢深御懸念被
為在皇國一體の御成業彌以御苦慮被為遊候ニ付詔書の通
日々臨御萬機御親裁被仰出候就てハ百官有司質素簡易ニ
原々至正公平を旨とし同心戮力益可勵忠勤尤御為筋存付

候儀ハ何事ニ不依不憚ニ忌諱正議直諫可致様御沙汰候事

〔行政官〕御沙汰 同 月

東海道 中山道 北陸道 附江州西街道

右三道春來官軍出張ニ付沿道の藩々より臨時金穀調達の
向ハ明細取調書取を以て會計官へ可差出事
但人馬賃錢等宿驛ニ引負ニ相成候分も其向々ニ取
調可申出事

〔同 官〕御沙汰 同 月

越後國所在留成の官軍 同國病院ニ療養の者共
右夫々入用の金穀等當分其最寄の府藩縣ニ取賄可致旨

御沙汰候事

但藩々の分り追て會計官より御下渡相成候間資料取調

可申出事

〔行政官〕御沙汰 十月

東京府

徳川遺浮浪の徒未だ方向を不定者有之趣も付於其府早々

取調處置可有之旨御沙汰候事

〔太政官〕御沙汰 同月

從今三等官以上の面々節朔參賀被仰出候間己刻參朝可有

之候也

但公卿諸侯衣冠差袴徴士直垂の事

〔同官〕御沙汰 同月

諸侯供廻り多分召連尊大華麗が間敷儀の昇平の久しき自

然と驕侈も赴き候弊風も付先達て古今の形勢御参考の上

簡易を主とし供連定則被仰出候處頃日浴中の往來も供人

多分召連間々狹箱等爲持或先供の者喝道も齊き舉動有之

哉も相聞御趣意を不辨次第も相當り以の外も候自今右様

の儀無之御定則通り屹度相心得候様御沙汰候事

但供廻りの多少も依り貴賤を相判候儀も無之貴の自ら

貴く賤の自ら賤しき道理故道路の往來各自も其分を辨

へ互たがひに相讓あつり通行つう妨さまたげ無な之の勿論もちろん又候得共諸列侯へも
右本文ほんぶんの通り被仰出候上うへの庶民あまみん末々まゝに至いたる迄此旨篤とと
領會りやうかい致し貴人きじんと行違ちがひ候節禮義れいぎを盡つくし不敬かへい等決けつて無な之の様
可相心得事

右の通被仰出候間府藩縣はんけんに於て其支配所しはいしょの末々まゝの者ものに至いたる
迄不洩もれざる様兼て可申諭置候事

〔太政官〕御沙汰 十月

東京府

今度こんど蒼生そうせい御綏撫そゐぶの思食おぼしめしを以て御東臨ごとうりん被為遊候處近日市中
に於て盜賊たうざく徘徊はいかい致し人民じんみんを苦しめ候趣相聞大に被惱おんざん宸襟しんせき

候依これによつて之軍務官ぐんむくわんと申合取締方まうしめはせりあまりかた一際ひと嚴重げんじゆう人民じんみん安堵あんど致し候様急
々可取計旨御沙汰候事

〔同 官〕御達 同 月

徴士ちゆうし三等官くわん以上の面々めんめん坐順ざおんの儀叙爵拜受ぎぎやくはいあうの有無ひにかはら不拘せんくわん先官
可為あやう上席事

但從來官位有之面々めんめん其官位くわんみを以坐順ざおん可有之事

〔同 官〕御達 同 月

今般御東臨こんぱんごとうりんの節せつ以當城皇居たうじやうきやうきよと被為定候さだめさせられ又付五官出張所御
取建とりたて又相成候條被仰出候事

〔東京府〕御觸 同 月

一 諸商法筋近來甚以亂雜（おほ）屬（おほ）し物品偽造のみ多く内外人
 民難澁（おほ）立（おほ）至り候（おほ）付改（おほ）て嚴重御法制可相建事
 一 此度在來の諸問屋（おほ）勿論其他何渡世（おほ）不限株鑑札申受
 渡世可致候就て（おほ）右鑑札御渡相成候間銘々厚く相心得
 諸品物眞偽判然と取仕立内外人民混亂迷惑不致様可相
 守然る上（おほ）右鑑札相請取候節身元金上納致す御仕法（おほ）と
 相成候間市中（おほ）の面々一已（おほ）の存付を以願出鑑札相受可申
 事

但鑑札無之者（おほ）の外國人取引難相成候印札所持の者萬
 一不仕合（おほ）付産業を失ひ候へ（おほ）早速商法局へ願出可

申候則商法局衆評の上（おほ）家業興起為致候様盡力致し若
 し不得止分散（おほ）及候者（おほ）の右印札商法局へ相納め身元
 金下げ渡し可申事

商法の儀（おほ）付市中一同見込の者（おほ）の忌諱を不憚五箇所（おほ）淺草
 橋砲洲東（おほ）と差出置候訴訟箱へ來る廿五日迄可申出事
 京府商法局（おほ）と

〔行政官〕御達 十一月三日

東京府

一目安箱書面の儀以來行政官（おほ）に於て御取調相成候間此段
 相達候事

〔同官〕御達 同日

一角力芝居狂言其外見せ物等の場所へ帶刀の者并小者體
 の者罷越威勢を以て木戸錢等も遣はさざりて入込候も
 の有之趣相聞甚以有間敷事候向後右體の所業於有之
 の即時可擽取旨及沙汰候條末々迄不心得無之様屹度可
 申付事
 一同斷假令木戸錢等の相拂候共暴威を振り場中を妨候者
 の是又嚴重取糺し品より候て可擽取旨及沙汰候條
 末々迄不心得無之様屹度可申付候事
 右の通被仰出候事

〔太政官〕御布告

十一月四日

今般御記録編輯相成候間五官日記書類副本取調當官へ早
 々差出し可被申尤以後一ヶ月分づ、取調置翌月十日限差
 出可被申候事

但し鎮將府より引送相成候記録取揃へ差出し可被申事

〔同 官〕御布告 同日

四等官以下元御内玄關代より昇降の事
あがりぞりる

〔東京府〕御達 同日

庶務方

先般江戸の稱を改めて東京と被仰出候上、地圖書籍類并番
 双紙等に至る迄も御地名を記載せ候類、都て東京と相書

候様市中へ不渡様急度可申渡候事

〔東京府〕御達

十一月四日

今般御東幸又付市民一同未々又至る迄御酒下賜候又付て
囚人共儀の其身の不正より御政典又觸候儀不得止事候
得共朝廷御撫育の御徳澤又相渡候段誠又愍然の至又被思
食候依之御酒下賜候條可取計候事

〔勅宣〕

同日

泉岳寺

大石良雄

汝良雄等固執主従之義復仇死於法百世之下使人感奮興起

朕深嘉賞焉今幸東京因遣使權辨事藤原獻吊汝等墓且賜金幣宣

〔太政官〕御沙汰

同日

新潟府

越後國柏崎縣被廢御領一圓自今其府可爲管轄旨被仰出候事

〔同官〕御沙汰

同日

同府

佐渡縣の儀追て何分の御沙汰有之候迄其府管轄又被仰付候事

〔東京府〕御觸

十一月五日

御東幸中別て火の元大切可致儀の勿論候所若及失火候得べ火元の死罪町役人の追放も可相成杯市中にて専ら申觸らし候趣相聞へ候右の御法律の勿論御布告も決して無之所全く奸賊共流言致し人心を爲致惑亂候儀も可有之不屈の至候若し此上不取留儀相唱へ候者有之候の無用捨可申出其次第より夫々可及沙汰候間市中不洩様早々可申通候事

〔同 府〕御觸

同日

脱走浮浪の者共今以東京市中致潛伏居夜々横行人民を

〔同 府〕御觸

同日

苦しめ候趣達敵聞深く被惱宸襟候依之嚴重御取締向被仰出候折柄奥羽北越の大軍御引揚り相成市中商家へ止宿致し候又就て自然混雑の憂も有之間敷とい申難く又付右兵隊市中へ止宿致問敷旨軍務官より嚴重被達候事候間市中又於ても其旨相心得已來止宿の儀申入候共堅く相斷可申萬一兵隊の中又右の御深意を不心得者有之強て申談候の其旨早速軍務官へ可申立萬一心得違致し私又止宿爲致候て兵士の爲も不相成候間此旨堅く可相心得候事

新嘗祭と申の天皇自ら新穀のみのれるを以て天地の御神
又供じたまひよもすがら拜したまふ年中の御大祭かれバ
來る十八日の府下の人民末々至る迄深く慎み火の元ハ
猶更大切又心を可用可申事

〔太政官〕御布告 十一月六日

天下一新の御政體被爲立第一民庶を綏じ各其所を得て倦
ざらしむる御趣意の處倉卒兵馬の事起り不爲得止次第
又候得共今日又至候上の愈國本と強くし皇基を培植被爲
遊今般新又治河使被設天下の水利大又御所置被爲在候又
付ての差掛り近畿の地又於て淀川堤防等十分又修覆致

し以後水害を除き民利を起し候ハ勿論且又豪華よりの運
送等も是迄の三十石通船又て徒又人力を費し實以不便
利故今日の御偉業又ハ不相副候間是非共蒸氣船又ても仕
掛利用可有之候處何分春來騷擾の折柄又右淀川の堤防
さへも御行届兼候得共東北征討畧平蕩の功を奏候上の追
々右等の儀も御詮議被爲在大又天下水利の道を起し民庶
福を生じ候様被仰出候間府藩縣又於ても此旨相心得上下
同揆其地方最寄又就て夫々利害得失相考勉勵可致旨御沙
汰候事

〔太政官〕御沙汰

同月十日

高五萬三千四百石餘
 上總國
 山武
 太田備中守
 其方儀先般上地被仰付為代地上總國夷隅郡高五萬三千三百石餘被下置候處右今般上地被仰付為代地前書の通改
 下賜事

大河内豊前守

高二萬七千二百石餘 上總國 夷隅郡

其方領知の内三河國高九千三百五石餘大和國高四百九十
 八石餘今般上地被仰付改て前書の通領知下賜事

〔太政官〕御布告 十一月十一日

御東幸中在國在邑諸侯每月十四日名代重臣を以て禁中御
 仮建所よ於て可奉伺天機旨被仰出有之候處御都合より
 十三日已刻迄可罷出更御沙汰候事

各藩

〔行政官〕御沙汰 同月十三日

開成所

以來行政官管轄よ被仰付候事

〔同官〕御沙汰 同日

東京府

開成所以來行政官管轄よ被仰付候間此段相達候事

〔太政官〕御布告 十一月十四日

諸願伺届等 御用出頭の輩中の口へ可罷出事

〔同 官〕御布告 同月十五日

天下一新更始の御政體被爲立第一兆民生を安じ業を樂み
 人心をして倦ざらしむる御趣意の折柄倉卒戎馬の事起り
 しより不被爲得已次第も可有之候得共今日戡定の功を奏
 じ稍平穩よ赴候上へ愈國本を強くし皇基を振起すべき御
 良圖可有之處既よ畿内の地よして淀川及諸川水溢暴漲沿
 河の民其害を蒙り殆ど流離よ至り候得共未だ其堤防を修
 し田宅を復すると能はば天災の所致不得已と雖其實ハ舊

習よ慣れ倫安怠惰の罪あり且又浪華港よりして淀河の運
 送ハ一日も不可欠儀よ付益其道を擴張し蒸氣船をも仕掛
 候よ至るべし纒よ浚築を加へ一時の災害を防ぎ或ハ從來
 湖通の三十石と唱へ候運船を而已頼み居候ハ實よ狭少の
 陋習よて今日維新の御偉業よ不相副候況や眼前の民苦を
 も不願してハ決して不被爲濟次第よ付太政諸官及府藩縣共
 よ同心戮力深く御趣意を體認すべく且其主者を立今般新
 よ治河使を被置候よ付速よ沿襲の陋弊を一洗し民害を除
 き水利を興し天下の人心をして倦ざらしむるの要務専ら
 勉勵可有之旨御沙汰候事

但治河の儀も付過日相達候へ共右の通更も被仰出候事

行政官御沙汰 十一月十五日

諸侯

諸侯家督相續并叙任等被仰付御禮參内の節

御太刀 一腰

大宮御所へ

干鯛 一箱

献上可致事

右の通向後御規則被相定候も付此段相達候事

同官御沙汰 同日

諸侯

諸侯家督相續并叙任等被仰付候節大宮御所へ献上物向後

於京都可差出事

太政官御沙汰 同日

會計官

万石以上以下諸屋舖是迄營繕司もて取調來候處以來東京

府取扱も被仰付候間此旨相達候事

同官御沙汰 同日

東京府

万石以上以下諸屋舖取調并地調等の儀以來於其府取扱候

様御沙汰候事

但屋舖拜領及拜借等願出候節都て行政官へ相伺御議定の上方石以上の辨事万石以下の其府より傳達可有之事
〔行政官〕御達 十一月十五日

東京府

病院の儀以來其府管轄に被仰付候事

但兵隊病人の儀に軍務官より支配致候に付此旨可相心得候事

〔東京府〕御觸 同月

當八月十五日東京開市の積先達て相觸候趣も有之候處御

都合も有之御差延し被置候處彌來十九日開市相成候間去る八月中相觸置候通可心得候事
右の通市中不渡様可觸示者也

〔太政官〕御布告 同月十七日

〔去十月二日大同小異の御布告あり〕

一京都傳馬御用所御取建に相成候迄三條通大宮西へ入る

三寶寺を以て假傳馬所に相定候事

一人馬の儀に御用通行出兵等に限都て當局へ届有之候分差出し其餘諸藩發京私用の分一切差出不申事

一諸官司初人馬入用の節の前以當局へ申達有之候得ば當日傳馬所より官司並向々旅宿等へ刻限通無遅々人馬相

廻可申事

一 諸官司より被差立候御用狀諸荷物等各官司印鑑有之通牒を以直又傳馬所又於て取扱可申事
 尤當局より掛りの者一人づ、致出役立合爲取扱候事
 一 宿駕籠等一切差出不申候事
 一 宮堂上方平生遣人夫各不同有之候得共都て領地高百石又付一箇年十人遣の割合御定又相成候付其分申込次第無賃又て繰入可申事
 一 右人夫遣方又より宮堂上方奥向の用筋又て領民も無之てハ難相叶節ハ其段前以届有之候ハ其通繰入可申萬

一 領民繰込方難出来候節ハ夫銀を以相納可申事
 一 傳馬所御定賃錢左の通申付候事

京都より大津迄

人足壹人又付

六百三十九文

本馬一匹

壹貫貳百七十八文

輕尻一匹

八百三十貳文

同 伏見迄

人足壹人

五百四十五文

本馬一匹

壹貫九十文

輕尻一匹

七百十文

同 淀迄

人足壹人

六百十六文

本馬一匹

壹貫貳百三十貳文

輕尻一匹

八百貳文

同 山崎迄

人足壹人

七百三文

本馬一匹

壹貫四百六文

輕尻一匹

九百十三文

同 榎原迄

人足壹人

三百十貳文

本馬一匹
輕尻一匹

六百廿四文
四百六文

右の通改て傳馬御用所取締役共へ申付候事

〔太政官〕御布告 十一月十七日

各國公使其他外國人東京滯留中諸所徘徊致し候砌於途中
宮親王家門跡堂上諸侯等出會候共雙方路上を半バ相讓り
通行可有之候且外國人へ附添候御國士官の向ハ外國人警
衛の儀も付下馬會釋等不致候間此段爲心得兼て相達置候
事

〔同 官〕御布告 同 月

來十八日新嘗祭於神祇官代被爲執行候又付十七日暮六ツ時より十九日朝五ツ時迄佛寺類鐘等停止被仰付候事

來十八日新嘗祭又相當り御祭於京師被爲行候得共

主上御遙拜被爲在候右祭の儀の先皇國の稻穀の天照大神

顯見蒼生之食而可活ものありと詔命あらせられ於天上狹

田長田令殖給ひし稻を皇孫降臨之時下し給へるものあれ

其神恩を忘給ひぬ且早淋之憂無之様と神武天皇以來

世々之天皇十一月中卯の日當年の新穀を天神地祇又供せ

らる、重祀又て三千年あちかく被爲行來十一月ついたち

より散齋致齋の御齋戒被爲在万民御撫恤の爲は御親祭被

爲在候事誠以下々の身として難有御儀又候諸般の事の中

世以來他邦の風儀も立交候得共神事のみの古代の儘にて

聊も駁雜無之純粹の古道又候京都及山城國中の當日より

明朝迄梵鐘誦經の音を禁止し庶人又至迄一意は神祇を尊

崇すべし御定有之天下一統昔の新嘗の日の戸を閉齋戒

いたし候趣古歌又相見へ候得共只今又至候て其子細も

不存徒は打過候故及御布告候右の譯にて全御仁恤の淑慮

より被爲行御祭又候條公卿諸侯大夫士庶人又致迄篤く相

心得當日の潔齋神祇を拜し共は五穀豐熟天下泰平を神祇

又祈奉るべし面々毎日食し候米穀の其元天祖の賜物ある
事を知御國恩の辱き事を相辨候ハ遊興安臥して在べき
よわらば寒村僻邑の土民雨を祈晴を願候も必感應有之況
天下一同至尊の御仁慮を體認し奉り共々祈請し奉るよ於
てハ神祇の冥感殊々速かるべき事候

〔行政官〕御沙汰 十一月十七日

明十八日新嘗祭又付三等官以上酉の刻無遅々參集可有之
事

但堂上諸侯衣冠徹士直垂の事

〔同官〕御沙汰 同日

在東京諸侯

明十八日新嘗祭又付巳の刻より申の刻迄の間參賀可有之
事

但重輕服の者可相憚事

〔同官〕御達 同月

來る十九日より東京鐵砲洲開市相成候又付てハ武家の向
無印鑑よて外國人居留地へ立入候儀不相成候自然要用有
之罷越候節ハ東京府へ申立印鑑請取出入可致候事

〔太政官〕御布告 同月十八日

外櫻田御門 日比谷御門

數寄屋橋御門

鍛冶橋御門

吳服橋御門

常盤橋御門

神田橋御門

一ツ橋御門

雉子橋御門

清水御門

田安御門

半藏御門

右郭内出火の節即刻參内可奉窺天機尤右御郭外と雖も風筋より依り參内可有之事

〔太政官〕御布告 十一月十八日

今上御誕辰 九月廿二日

右の外御大禮の節但其節々御布令有之候事

神武天皇御忌 三月十一日

仁孝天皇御忌 二月六日

孝明天皇御忌 十二月廿五日

右の當日刑罰並拷問等可相除旨被仰出候事

〔行政官〕御達 同月

屋敷拜領並拜借等の儀以來萬石以上の辨事萬石以下の東京府へ可願出事

但中下大夫上士及行政官支配同附の面々の觸頭を以可願出事

〔同官〕御達 同月

中下大夫上士

春來歸順證書等差出進々上京致し候處各勤王實効の厚薄
 も有之趣も候得共御一新至仁の御處分を以今般其方共一
 同本領安堵被仰付候も付ての追て隨分の御用可被仰付候
 間此旨相心得可申事
 去る五月十五日本領安堵被仰付候面々へ被仰渡の御趣意
 并其後被仰付候御規則の條々一同相心得可申事
 舊席高家交代寄合の外官位の儀都て被爲止候事
 中下大夫上士の格席振合等諸事觸頭へ承り合可申事萬石
 以下知行所の儀へ最寄の府縣可爲支配旨先般被仰出候通

相心得可申事

〔行政官〕御沙汰 十一月

病院の儀醫者看病方兎角不行届の趣相聞へ實々至仁の御
 趣意も相戻り甚以不相濟事も候依之今般御醫緒方立養
 少允横山主税大允兩人爲取締出張屹度規律相立療養行届
 候様被仰付候尙於其府も取扱方精々盡力可有之旨御沙汰
 候事

〔同〕官御沙汰 同月十八日

今般朝臣も被加本祿安堵被仰付候面々の内是迄扶持米取
 來候向の石高俵高も相直し本祿も結込以來扶持米の被廢

候事

但御扶助相願行政官支配同附被仰付候輩ハ扶持米結込
不被仰付候事

〔太政官〕御布告 十一月十九日

諸藩

諸藩とも從來國名等を以て姓氏ヲ替へ相用候得共向後總
て本姓を可稱旨被仰出候事

〔同官〕御布告 同月二十日

此度箱館産物問屋仲買等の名目相改め箱館産物賣捌人
唱へ荷物の儀ハ大坂兵庫堺敦賀等ハ於て會所取建總て引

請取扱候間右賣捌人の外農商共望の者ハ廣く賣捌候
付其最寄會所へ可申出候事

但會所の取扱を不經して船方より直に賣買候儀一切不
相成候若違背の輩於有之ハ屹度御咎被仰付候條心得違
無之様可致候事

〔行政官〕御沙汰 同日

軍務官

病院の儀是迄其官よて支配候處自今京都府支配ニ被仰付
候間此旨相達候事

〔同官〕御達 同月廿五日

宮堂上方知行
所有之向々

一 制札の最寄府縣より揭示の事

一 領所村々役人等公事より係り候者の府縣より於て可致差配
事

但其地頭限り用向申付候儀の別段の事

一 領所村々宗門人別帳の村役人より直に府縣へ可差出事

一 領所年貢の儀の其年々府縣より於て取極相達候事

但當年の儀の從前の通可取計候事

一 領所人夫遣方の儀の兼て御布告有之候驛遞司定則通り
よて猥に申付間敷事

一 領所村方へ無據次第よて用金等申付候節の前以一應府

縣へ可問合事

右の外政務へ關係候儀の一切府縣より於て可取計候間兼て
相心得候様御沙汰候事

（行政官）御達 十一月廿五日

中大夫以下知行
所有之面々

一 制札の最寄府縣より揭示の事

一 知行所村々役人共其進退とも凡て府縣より指揮致し候
よ付差配致す間敷候尤宗門人別帳の村々より直に府縣
へ可爲差出事

一知行所年貢の儀ハ其年々府縣ニ於テ取極可相違事
一知行所村々へ夫役用金等勝手ニ申付間敷事
右の外政務ニ關係致し候儀ハ一切府縣ニ於テ可取計間兼
テ相心得候様御沙汰候事

〔行政官〕御沙汰 十一月廿七日

在京諸侯

寒中爲_レ伺天機來月朔日巳刻參朝可有之事

〔同官〕御達 同日

駿遠參三州ハ徳川龜之助へ知行被仰付候ニ付テハ三州中
駿遠參三州ハ駿遠有之面々

領知の面々ハ追テ替地可被仰付ニ付此旨相心得可申候尤
領知本高込高等有之分上知の節土地相改現在有高を以替
地可被宛行候間是又相心得可申事
但當年收納の儀ハ是迄の領主取納可申事

〔同官〕御達 同日

中下大夫上士に至る迄從來京都住居の外一同東京へ定府
ニ被仰付候間早々彼表へ可罷出候事

但自今諸願伺届等總テ東京へ可差出候就てハ諸心得方
觸頭へ可承合事

〔同官〕御沙汰 同月廿八日

諸 侯
 花押くわあふの自書おんあふの證あやうに有あ之候處ところ文飾ぶんあきの弊習へいしゆに仍なほり往々むぎむぎ彫刻てうこくの
 分ぶんを相用あひあひ候事こと其主意そのしゆいを失うしなひ無謂むゐ次第だいだい又また付向まう後のち花押くわあふを相用あひあひの
 候書類あやうるゐ凡もろもろて自筆おんひつに相認あひたぬ可差さ出旨しゆ御沙汰ごさた候事こと
 行政官ぎやうせい御沙汰ごさた 十一月廿八日

諸 堂 上 侯
 中下大夫
 一年五十歳いちねんごじうさいに至いたり實子じつし男子なんし無な之の本姓ほんせい血統けつどう相撰あひあひ養子やうし可相あひあひ願事ねがひ

但た廢疾はいぢやく及あ事故じこ故ゆゑ懼おそり候輩こうばいの年齢ねんれい不あ拘は可べ願出ねがひい事こと
 一 父年五十歳ちちねんごじうさい至いたり嫡子ちやくし年十七歳ねんじゅうしちさい及あび所勞ところらう等らう又またて隱居いんきよ
 の儀願出ねがひい候ことのい家督けとく相續あひつぎ御評議ごへうぎ可べ有あ之の事こと
 一 嫡子ちやくし嫡孫ちやくそん自今年おんこんねん拾五歳じゅうごさい至いたり元服げんぷく可べ致いた右年みぎねん齡れい不あ致いたと
 も願ねがひ仍なほり時宜ときぎの御詮議ごせんぎ可べ有あ之の事こと
 但た武家ぶけ又またての從來じゆらい乘のりり出だしと唱候となへ得え共とも今般官武こんはんくわんぶ一途いつと
 又また被仰出まをさ候こと又また付つての總もて元服げんぷくと可相唱あひあひ事こと
 一 出陣しゅつぜんの儀ぎの右年序みぎねんおよ不あ拘は各其器量おのづかづか次第だいだい御指揮ごしゆい可べ有あ之の事こと
 但た六十歳むそくさい以上いじやう出陣しゅつぜん可べ為な勝手かつて事こと
 右みぎの通被仰出とほまをさ候事こと

〔行政官〕御沙汰

十一月三十日

生駒大内藏

今般諸侯列被仰付候事

〔同 官〕御沙汰 同日

公議人

今般議事體裁取調所御取建相成諸藩公議人同所よて管轄候様被仰出候間其旨相心得以後建言伺届等同所へ可差出候事

右の通於東京被仰出候よ付ての當時在京の公議人總て東下可致候且又公議人不差出藩々の早々任撰東京へ可罷出

旨御沙汰候事

〔同 官〕御沙汰 同月

一諸藩分知末家よて從前徳川附屬の輩勤王の實効有之者の本祿如舊下賜實効無之輩の上地被仰付候事

右の通被仰出候よ付ての分地末家の者共未だ御處置無之輩の早々書取を以可伺出且春來匆卒の間不取敢本家へ御預被仰付置候分の今般改めて御處置可被仰付候間早々可伺出候事

〔同 官〕御布令 同月

府 縣

今般東京に於て議事體裁取調所御取建相成候に付て、
御體裁相立候上、府縣議員も徵集會議被仰出候間、兼て
其心得可有之旨御沙汰候事

〔行政官〕御沙汰 十一月

神衛隊

早春以來、久々滞在王事、勤勞の段志情神妙の至、候今度
夫々復舊籍候様申付候間、此旨可相心得事

〔太政官〕御布告 十二月朔日

來る八日還幸御治定の事

但御道筋東海道の事

〔行政官〕御達 同日

帶刀人僧尼の類市中町並、住居致し候者の内、其町戸籍の
諸役出金を否み候者、問々有之哉、相聞へ有間敷事、候向
後右様の者、於有之、居屋敷建家共取揚可申事

右の通於京都府布令候間、相達候事

〔太政官〕御布告 同月二日

跡目相續隱居家督養子縁組等の儀、付問々不正の筋も有
之哉、相聞以外の外の事、候以來願出候節、於觸頭其筋合
篤と取糺し候上、證書相添願書差出可申、萬一不都合の儀、於
有之、屹度可被及御沙汰事

但觸頭相勤候者ハ同勤の證書相添諸官出士觸頭無之輩
ハ官長の證書相添差出可申事

〔太政官〕御沙汰 十二月三日

諸侯

諸侯嫡子叙任の儀往々願出候者も有之候處向後不被仰付
候間爲心得此段相達候事

但功勞有之者ハ格別の事

〔同 官〕御沙汰 同日

五島飛彈守

領民中邪宗信仰の者有之趣右等の者取調候上處置方の儀

ハ總て長崎府へ可伺出候一巳の取計みて外方の差響又相
成候てハ一致の御趣意又相戻り候間向後屹度相心得候様
御沙汰候事

〔同 官〕御沙汰 同日

長崎府

別紙の通五島飛彈守へ御沙汰相成候間於其府も兼て相心
得相當の指揮可有之尤大事件ハ時々可伺出旨御沙汰候事
(御別紙ハ前御沙汰書を云ふ)

〔東京府〕御觸 同日

今般東京御開市相成候又付居留或ハ一時出府の外國人府

内遊行可致レ勿論ニ候得共自レから彼我禮儀も異レり殊更東
の人民ノ未レだ外國人ノ情態ヲも熟知セざる故何様ノ不都
合生ト候も難計ト候間止宿ヲ爲致問敷儀ノ勿論自然市中ノ旅
店等へ参り止宿致し度申聞候ハ築地外國人旅館へ相越
候様申論止宿ノ儀ハ堅く斷り候様可致事
右ノ趣市内へ不渡様可觸示者也

〔太政官〕御布告 十二月四日

當夏御發弘相成候金札ノ儀東北未だ紛亂中ニ付御割渡不
相成候處今般平定ニ付て石高割賦ノ内當節より御渡相
成候間早々請取治ク施行可致様御沙汰候事

但委細ノ儀會計官へ可承合事

〔同 官〕御布告 同日

金札ノ儀ハ世上融通ノ爲御發弘ニ相成候處近來往々分合
を付致取引候者有レ之大ニ物價紛亂ノ基ヲを生シ甚ハ以不便ニ
成行候以來時ノ相場ヲを以通用可致様御沙汰候事

〔同 官〕御布告 同日

當夏以來非常ノ譯ハ有レ之ニ付月給ノ外別段御手當被下置
候得共以來ハ不被下候事

〔行政官〕御沙汰 同日

病院の儀先般其府支配に被仰付候得共御僉議の筋も有之候間不及支配更に軍務官へ引渡可申事

〔東京府〕御觸

十二月四日

東京開市に付南八町堀續新規町割出來地所御貸渡相成候間出店移住の爲地所拜借致し度者の鐵砲洲御役所へ早々可申出候

但町割繪圖面の鐵砲洲御役所門前より掲置候事

右の趣市中前未々迄不渡様可觸示もの也

〔同 府〕御觸

同日

空米帳合商ひの儀の前々より制禁に有之候處御一新以來

相弛み候儀と心得違致し武家拂米等の名目を假り或は私會所杯と唱空米の取引致し候者共有之哉又相聞へ以の外之事は候以來心得違致し紛敷取引等致し候者於有之は無用捨吟味の上携候者迄夫々御所置可有之候右の趣市中不渡様可觸知者也

〔太政官〕御布告

同月五日

府縣ども其管轄地内の寺院並萬石以下の領地中にも有之候寺院等は迄諸街道往來の節各寺の印鑑を以迄通行候得共往々紛敷儀も有之に付以後總て最寄の府縣に於て往來の趣意聞届印鑑相渡可爲致通行候事

但各藩領地内かくはんりやうち有之寺院あ前顯ぜんけんの通其藩はん以て可取扱事とりあつかひ

〔太政官〕御布告 十二月五日

近日還幸きんじつくわんかう被爲在候あ付東海道筋とうかいどうすぢ爲御道調みちしらべ五辻いつつじ彈正だんしょう大弼だいしゅう并
役々やくやくの者もの附屬ふぞく去二日きふ東京致發とうきやうしやうはつ途候とち間通行あひだつうかうの節しゆ府藩縣ふはんけんとも
下向げかうの砌みせり同様どうよう御用伺ごういんこひの者もの差出可申候事さしだせうしんこうじ

〔太政官〕御布告 同日

還幸くわんかう來る八日御發はつにちごはつ輦れん被仰出候事おほせうだせうこうじ

但東海道とうかいだう御通ごつう輦れんの事こと

〔同官〕御沙汰 同日

沿道えんだう諸藩しよはん

今般還幸こんはんくわんかう御道筋ごだうすぢ御警衛ごけいゑいの人数にんご指出方等しゆしだしかた府縣ふけんより相達あひたつ候儀こうぎ
も可有之あひだかひ間兼あひだかひて可相心得あひだかひ旨御沙汰候事あひだかひ

〔太政官〕御沙汰 十二月五日

沿道えんだう府縣ふけん

御東幸ごとうかうの節しゆ府縣ふけんに於て御警衛ごけいゑいの人数にんご不備置向そかへおきむかひも有之不都あ
合あひの事ことも候今般還幸こんはんくわんかうの砌みせりに最寄もよひの藩はんへ申合相應まうしあはせさうおうの人数にんご差
出いで嚴重げんじやう御警衛ごけいゑい可致旨御沙汰候事かちあひごさたこうじ

但虚飾きよしやくを以無益むえきの失費あひび無之様な可相心得あひだかひ事こと

〔東京府〕御觸 同日

金札御製造きんさつごせいぞうも相成候御趣意ごしゆいの第一物産だいいつぶつさんを開きひら隨あて商法融あやうはふやう

通の爲御施行被仰出京都大坂を始め西國に於ては夫々通用被仰出候得共未だ東國の戦争混雜の折に付是迄御見合に相成候處追々御平定に至り候間兼て御趣意の通り諸國一般に楮幣通用被仰出候故此段無洩可相心得但右楮幣の儀に自然の相場に随ひ御施行相成候間此旨可相心得事

一金札御施行被仰出候上の貧究の者の勿論其他一般へも夫々御貸渡相成候間産業の爲拜借願度者の當府へ願出候に其分限に應じ御貸渡に相成候間各産業の基を立可申尤富貧の差別も有之事故願出候に御調の上夫々御貸渡可有之事

一右拜借金札上納の儀に當辰暮より壹割づ、金札を以て上納致し來る辰年迄十三年まで上納濟切の事

一極貧究めて其日暮兼候者をバ町々名主共より取調各産業の見込を立金札拜借可願出尤此等の輩に別段御仁惠を以て御貸渡可有之事

一金札通用被仰出候上の當辰年より一切年貢諸運上等金札もても正金もても上納可致事

但金札上納の時の相場を以て可相納事

尤政府に於ても同様御遣出の事

右の通町中末々迄不洩様可相觸候事

〔行政官〕御沙汰 十二月六日

還幸御當日奉迎場所

議定以下三等官以上

西大手通馬場先御門内

四等官五等官以下九等官以上

馬場先御門外

但當日不及登城候事

〔同官〕御達 同日

東京府

是迄鐵砲洲有之外國事務局以後東京運上所と相唱候様

改めて被仰出候間此旨相達候事

但其府可爲管轄事

〔太政官〕御布告 同月七日

醫師の儀ハ人の性命又關係し實ハ不易職ハ候然ハ近世不學無術の徒猥ニ方藥ト弄シ性命を誤リ候者往々不少哉又相聞大ニ聖朝仁慈の御旨趣又相背キ甚以不相濟事ハ候今般醫學所御取建又相成候又付てハ屹度規則ト相立學の成否術の工拙を篤ト試考シ免許有之候上からでハ其業を行ふ事不相成様被遊度思食又候條於府藩縣兼て此旨相心得治下醫業の徒へ改めて中聞置各其覺悟ト以益學術ト研

究可致旨布令有之様被仰出候事

（太政官）御布告 十二月七日

與羽兩國の曠僻遠の地にして古來より教化沿く難敷及儀も有之候又付今般兩國御取調の上府縣被設置廣く教化を施し風俗移易人民撫育の道厚く御手を被爲盡度思食を以て陸奥國を磐城岩代陸前陸中陸奥と五國又出羽國を羽前羽後と二國又分國被仰付候條此旨可相心得事

磐城國

- 一高六萬四千七百七十石二斗五升八合 白河郡
- 一高四萬八千九百九十八石一斗四升九合 石川郡

- 一高十萬六千七百五十二石八斗五升一合八勺五才 田村郡
- 一高四萬石四斗七升九合五勺一才 菊多郡
- 一高四萬三千六百七十七石九斗五升五合 白川郡
- 一高五萬四千八百十六石一斗二升九合三勺 磐前郡
- 一高三萬二千四十一石六斗六升八合 磐城郡
- 一高三萬千七百十七石七斗二升四合 檜葉郡
- 一高二萬二千七百二十五石七斗九升 標葉郡
- 一高五萬千四百一十一石六斗二升一合 行方郡
- 一高二萬四千八百九十八石一斗九升 宇多郡
- 一高十一萬四千四百五十七石二斗五升一合六勺 伊達郡

一高二萬三千五百八十一石八斗一升

亘理郡

右十三郡

高合六十五萬八千三百七十九石八斗七升七合二勺六才

岩代國

一高八萬七千二百九十四石六斗六升六合九勺 會津郡

一高五萬二千六百九十一石一斗七升六合 大沼郡

一高十二萬二千八百四十八石二升 耶麻郡

一高七萬四千三百八十四石二斗六升五合 河沼郡

一高六萬九千五百五十九石六斗二升八合九勺 岩瀬郡

一高九萬七千九百九十五石九斗一升三合三才 安達郡

一高五萬四千七百四石四斗四升七合二勺九才 安積郡

一高八萬九千三百六十八石五斗九升二合九勺 信夫郡

一高二萬三千五百三十九石二斗三升 刈田郡

一高三萬九千四百四十二石九斗四升 伊具郡

右十郡

高合七十萬四千二百二十八石八斗七升九合四勺二才

陸前國

一高三萬五百二十七石七斗八升 柴田郡

一高六萬四千二百四十九石九斗 名取郡

一高七萬五千四百三十五石八斗二升 宮城郡

一高四萬三千六百一十一石九升
 一高三萬九千二百四十七石四斗六升
 一高二萬四千九百六石九斗八升
 一高五萬七千九百九十五石七斗九升
 一高六萬七百四十七石二斗八升
 一高十三萬五千九百七十石三斗八升
 一高四萬三百七十二石九升
 一高一萬四千九百二十七石三斗五升
 一高七萬三千四百四十一石六斗二升
 一高二萬千六百八十二石六斗八升

黒川郡
 賀美郡
 玉造郡
 志田郡
 遠田郡
 栗原郡
 登米郡
 牡鹿郡
 桃生郡
 本吉郡

一高一萬五千五百二十三石
 右十四郡
 高合六十九萬七千八百三十八石一斗八升
 陸中國

一高八萬三千十七石三斗二升
 一高七萬七千三十一石二斗五升
 一高四萬五百八十六石六斗五升
 一高三萬八千三百六十二石六斗九升二合
 一高四萬二千四百四十七石六斗六升六合
 一高四萬七千八百八十五石二斗七升九合

氣仙郡
 磐井郡
 膽澤郡
 江刺郡
 和賀郡
 稗貫郡
 紫波郡

一高三萬五千九百三石三斗八升九合

岩手郡

一高一萬八千九百八十三石六升三合

鹿角郡

一高二萬六千七百二十五石二斗一升

關伊郡

一高一萬二千八百九十一石九斗七升一合

九戸郡

右十郡

高合四十二萬三千百三十四石四斗九升

陸奥國

一高一萬三千八百八十八石五斗四升二合

二戸郡

一高三萬八千五百七十五石二斗五升九合

三戸郡

一高一萬三千九百一十一石七斗二升二合

北郡

一高三十一萬七千二百六十二石二斗三升

津輕郡

右四郡

高合三十八萬三千六百三十七石七斗五升三合

羽前國

一高二十一萬六千六百六十一石二斗二升二勺三才

置賜郡

一高三十六萬六千四百四十七石一斗三升五合九勺七才

村山郡

一高六萬二千三百八十七石四斗五升三合八勺

最上郡

一高十五萬九千八百七十三石八斗八升三合七勺四才

田川郡

右四郡

高合八十萬四千五百六十九石六斗九升三合七勺四才

羽後國

- 一高二十三萬四千三百二石三斗五升六合一勺四才 飽海郡
 - 一高八萬四千七百十九石九斗六升 秋田郡
 - 一高二萬二千八十三石一斗五升四合 河邊郡
 - 一高九萬三千六百一十一石七斗九升四合 仙北郡
 - 一高五萬四千八百三十六石七斗六合 雄勝郡
 - 一高二萬八千四百五十三石六升三合 山本郡
 - 一高五萬九千九百五十石二斗九升二合 平鹿郡
 - 一高七萬二千六百七十石三斗八升六合三勺 由利郡
- 右八郡

高合六十五萬六百二十七石七斗一升一合四勺四才

〔太政官〕御沙汰 十二月七日

大宮來る十六日己刻九條家へ御方違行啓又付爲伺御機嫌
來十七日己刻九條家へ參入可有之事

但於途中無禮の儀無之様可相心得且九條家へ參入可
爲衣冠尤所勞不及名代候事

〔同 官〕御沙汰 同日

御方違行啓後惣て大宮へ窺御機嫌獻上物等ハ九條家へ參
入可有之事

〔同 官〕御布告 同日

當分三等官以上并權辦事九門内騎馬乘輿の儀ハ至急の御
用も有之被差許候儀又付宮堂上諸侯等又行違候節不及下
馬下乘旨被仰出候事

〔太政官〕御布告 十二月八日

親王方九門内乘馬通行當分被免候事

〔同 官〕御布告 同日

今般東北平定の成績大廟へ被爲告ため海路還幸可被遊思
食の處御艦不相調陸路還幸被爲在候又付て御日合も被
爲懸來る廿五日先帝三年御忌辰又餘日も無之條不取敢以
勅使被爲告來年更又御參拜可被遊旨被仰出候事

〔同 官〕御布告 同月十二日

今般東北平定又付賞罰の典被爲舉候て一先還幸被遊度思
食の處將士功勳の等級未精密取調行届兼時日還延及候
間尙還幸の上速又褒賞の典可被舉候條此旨一同可相心得
様被仰出候事

〔同 官〕御沙汰 同月八日

以來松平稱號被止本氏可稱之事
但本姓松平唱來候者ハ如舊可相心得事

〔行政官〕御達 同月九日

先般府縣管轄の地圖差出候様相達府縣限りよてハ疋ど難

取調儀も可有之依て各藩領地飛領共一圓最寄府藩縣示合
早々取調差出候様相達候間其旨相心得夫々示合取調候様
御沙汰候事

但大凡一里一寸の見圖りを以云々相達候得共小圖り
ハ不分明の儀も有之候間一里三寸の割を以圖取可致事
〔行政官〕御達 十二月九日

東北諸藩

當夏御發行相成候金札の儀東北紛亂中其地方諸藩へ未
御割渡不相成候處今般平定よ付て石高割賦の内當節よ
り御渡相成候間早々請取洽く通用可致様御沙汰候事

但委細の儀會計官へ可承合事

右の通於東京被仰出候間相達候事

〔太政官〕御布告 同月十日

先般被仰出候通來春再御臨幸被爲遊候付舊本丸城蹟よ於
て宮殿御造營被仰出候事

〔同官〕御布告 同日

來十四日皇學所御開講被仰出候間宮堂上及非藏人諸官人
よ至迄入學勉勵可致候尤兼て御布告の通三十未滿小番被
免の輩ハ専ら勸學致候様可心掛候近來皇國の學相衰へ外
國へ對し候ても不都合よ付今般更皇國學盛大よ御振起

被遊度思召候間各御一新の御趣意を奉體し異日國家の大用も相立候様一同奮發勉強可致旨御沙汰候事
 但進て大學校御取建可相成候得共當分の處九條家と被仰出候處更も二條家を被用候事
 一御開講當日卯半刻參集可有之事
 一衣體の儀堂上狩衣直垂地下麻上下の事
 規則
 一入學の儀毎月四の日被定候尤入學當日可爲正服束脩の儀の御用掛へ可伺出事の儀
 一入學願度輩其前月廿八日迄辨官事へ可届出の事

一元大學寮代へ參入の輩更不及入學式事
 一毎年正月御開講日
 古事記表文講義
 二七日 講釋 古事記 三八日 同 令義解
 四九日 會讀 續日本記 五十日 講釋 萬葉集
 一講釋 自四時至九時
 一會讀 同
 一素讀 每朝自六半時至八時
 一輪講 同 自八時至七時
 一對讀 同 於諸局隨意爲之

一 歌詞會二の日

一 詩文會七の日

右二點に於局中に於いてこれを爲之自七時に至晚時に

〔太政官〕御布告 十二月十二日

宮堂上諸侯及中下大夫社寺に至る迄從來京師東京大坂其他
自領ありやう非あらざる所ところ於て用達出入等申付候者へ苗字めうじ帶刀たいだうを許ゆる
し或家來あるはけりと唱なさせ候儀不謂次第いはれざるおだい付自今禁止被仰出候事
但苗字帶刀格式等其家限り内輪取扱の儀なり可爲勝手候
若又其家の抱かかへ無な之の差支さつあ候向も有之候なり其管轄
の府縣へ可申出願おまが又仍り其地民籍可被差除事

〔太政官〕御布告 同日

諸藩士并兵卒等自今九門内勝手なり通行又に參朝の行列等
見物けんぶつ立入候儀決て不相成候若要用有之候なり九門外見
張番所へ相届候上通行可致事

〔同 官〕御布告 同日

市中男女並旅人等九門内勝手なり通行致候儀決て不相成候
若無余儀用向有之候なり其旨九門外見張番所へ相届候上
通行可致且御門先通行の節立留り見物致候儀不相成候事
〔行政官〕御達 同日

中大夫以下領地支配の儀なり付此度被仰出の通なり候付てなり

兼て御布令相成候孝子義僕を始七十歳以上御賑恤の儀も
中大夫以下領地の者共も最寄管轄の府縣に於て租税金の
内を以被下方取計可然旨御沙汰に付此段爲念申達候也

〔行政官〕御達 十二月十二日

天機伺の儀是迄辨事宿直の當番へ申出候振合も有之候處
先般辨官事分課御定に相成候に付此後奏聞傳達分課の辨
事へ天機伺可致旨被仰出候事

但並御番諸侯日々着到退出届同様の事尤右分課當分久
世前宰相中將東園宰相中將兩人に候間同人へ可申入事

〔同官〕御達 同日

諸官に於て宮堂上諸侯及其他に至る迄諸願同等差出候節
御附札の體裁區々に相成候に付向後雛形の通諸官一定候
様被仰出候事

御附札

諸願伺書



御附札都て中奉書半切に相認全文一事に涉り候分は書出
し三四寸の處其上へ張付け諸件同等の分は其件々の上へ

張付候事

右の通ふ付相達候事

〔行政官〕御達

十二月十二日

一來る十七日宮堂上諸侯以上大宮へ爲伺御機嫌九條家へ
可致參入きんにかいたまへく 徵士ちゆうしの輩不及其儀候事

一此頃御布告このころ 相成候大宮へ獻上物九條家へ參入の儀の
御假住居中の儀かりたまひ 今般行啓こんはんぎやうけい 付てり別段不及獻上候
事

〔太政官〕御布告

同月十三日

諸國寺院の領地從來守護不入と相唱候分政務等自ら取行

ひ今以府藩縣の所轄いまもつてかはんけん 不相成も有之趣相聞候間右等の寺
院取調早々可申出旨御沙汰候事

〔同 官〕御沙汰

同月十四日

軍務官

八王子元同心以後其官可爲支配旨御沙汰候事

〔同 官〕御沙汰

同日

萬民を保全ばんみん し永世不朽の皇基えいせいふくたう を確定するの固より萬機の
政令公論せいれいこうろん 出るいっ ありて即御誓文の大本そつごせいぶん 候依て當夏議
政行政の御制度相立各府藩縣より徵貢士せいこうし の法御設はふごせつ 又相成
候儀即御政體の通ごうぎ 候然る處春來兵禍引續候處より御誓

文の御趣意或の未だ周達せざるも有之候處當今追々四方
鎮定彌前條の通廣く會議を興し萬機公論に決すべしとの
御趣意を以今般改めて被仰出東京舊姫路邸を以て當分公議
所と御定に相成來春より開議致候様被仰出候間各彼我の
私見を去り公明正大の國典確立の所より熟議を遂げ御慈文
の御趣意に貫徹致候様御沙汰候事

但開議期日御規則等へ追て御沙汰可有之候事

〔太政官〕御布告 十二月十五日

今般一先還幸被仰出當月八日東京御發轅來る廿二日御着
轡被爲在候に付即日辰の刻爲御迎參朝并大宮御所へも恐

〔院〕可申上候事

但御迎并參朝の節衣體の儀に衣冠無位の輩に直垂着用
可有之事

〔同〕官御布告 同日

來る廿二日御着轡に付爲御迎即日辰の刻五官知事粟田口
へ可罷出候事

但知事差支の節に副知事又の判事よても可罷出候事

〔同〕官御沙汰 同日

在京諸侯

今般一先還幸被仰出當月八日東京御發轅來る廿二日御着

輦被爲在候又付即日己の刻應司家へ參集四つ足門外にて
奉迎還幸被爲濟候へば退散可有之翌廿三日爲恐悅參朝并
大宮御所へも恐悅可中上候事

但御迎并參朝の節衣體の儀の衣冠無位の輩の直垂着用
可有之猶又恐悅中上候節所勞の輩の重臣名代不苦候事

〔太政官〕御達 十二月

五等官守辰又至迄官人又の宮侍等從前の爵位相稱し在勤
罷在候事官等又於て甚不體裁又付右在勤中官位致返上候
様申付候事

但官名相除候上存寄の通稱來る廿日迄又名々官長へ

可申出候事

〔同 官〕御布告 同月十八日

拜領地並社寺等除地の外村々の地面の素より都て百姓持
の地たるべし然る上の身分違の面々又て買取候節の必名
代差出し村内の諸役無支爲相勤可申事

一右同斷町分の地面の向後都て町人名前の券狀たるべし
然る上の身分違ひの面々又て買取候節の必名代差出し町
内の諸役無支相勤させ可申事
右の通相心得候様被仰出候事

〔同 官〕御布告 同日

宮堂上府藩縣及社寺の家來小者等且雇仲間爲體の者の内
間々商賈の店よ於て高價の品を纒の代錢を以て押買致し
又ハ賣屋等よて飲食の上代料不相拂立去候者も有之哉
又相聞へ候よ付向後右等の振舞致し候者ハ直よ召捕候間
家來末々よ至る迄決て心得違無之様兼て示し置可申旨被
仰出候事

但心得違の者召捕候節若逃去候ハ假令主家門内たり
とも付入穿鑿可致問何方又匿居候とも速よ引渡可申事

一太政官一御布告 十二月十八日

大政御一新よ付天下の衆庶其所を得各其志を遂候様覆載

至仁の御趣意よ付齟穿孤獨窮民等よ至迄追々御賑恤の道
も相立候處戊辰以來國事よ周旋し皇室よ勤勞候者却て姦
更の爲よ非命の死を遂げ其妻子等飢寒よ苦且幸よ存命候
共脱籍流離候族も有之哉又相聞へ實よ不憫の事よ候依之
今般京都府に於て夫々取調死亡の忠魂を慰祭し妻子救助
等執行ひ候よ付てハ府藩縣共其管轄中右等の者有之候ハ
ば篤と取調祭祀救助等行届洽く御仁澤よ浴し候様可取計
旨御沙汰候事

一同一官一御沙汰 同日

青山左京大夫

其方領知高の内遠江國に於て高一萬二百四十石餘の處今般徳川新三位中將へ被爲下置候に付右上地被仰付爲代地別紙の通丹波但馬兩國の内にて下賜候事

但遠江國舊知高地所村々急々取調可申出事

〔行政官〕御沙汰 十二月十八日

中下大夫上士

駿遠參よ於て領知有之輩へ先達て申達候件々の中當年収納の儀は是迄の領主取收可申旨相達置候處御摸様替よ相成當年收納代地よて取收不相調輩の東京會計官よ於て米金の内を以相渡可申間此旨可相心得事

〔同官〕御達 同日

三河縣

三遠兩州の内も今般徳川三位中將へ領知下賜候間當年租稅より同人へ收納致し候様被仰付候に付此段相達候事

〔辨事〕御達 同日

來る元日五等官己上公卿諸侯の狩衣徴士直垂六等官己下麻上下着用登城年賀可申上様被仰出候間仍て申入候也

〔行政官〕御達 同月十九日

一 毎月朔登城の事

一 郭内出火の節不及登城候事

一 歲暮爲御禮來る廿八日己の刻登城の事

一 來己年年始爲御禮元日辰の刻登城の事

一 年始歲暮とも登城の節狩衣直垂着用可爲勝手事

附り從者の向着服勝手次第の事

右の通御治定候間此旨相達候事

〔行政官〕御沙汰 十二月十九日

來る廿八日己刻女御入内即日立后被仰出候事

但當日重服者參朝可憚事

〔太政官〕御布告 同月二十日

五等官以上來る二十八日己の刻爲歲暮御禮登城の事

但直垂着用從者の向り勝手次第の事

〔同 官〕御布告 同日

一 公議所開議の期日來己年二月十五日と被仰出候事

一 公議人人員の儀は是迄大藩三人中藩二人小藩一人の御

規則は候處以來各藩一人宛可差出事

一 公議人の儀は是迄其藩論より可代人才差出候様被仰出有

之候得共右の執政參政の中より一名致撰擧可差出事

一 是迄主人在職の藩々公議人差出不及様被仰渡置候得

共以來主人在職の有無不拘各藩總て可差出事

右の通被仰出候事

〔太政官〕御布告 十二月廿日

孝明天皇三周御忌辰御參拜又付廿三日晚より廿六日朝迄

御神事候間僧尼並重輕服の者參内可憚事

〔同 官〕御布告 同日

孝明天皇三周御忌辰又付來る廿八日爲御機嫌伺

生 鯛 二 尾

但合獻上可有之候事

〔同 官〕御布告 同日

就孝明天皇三周御忌辰諸臣參拜の節不_レ及獻備事

但參拜の節山陵_二被設置候玉串可獻備事

〔辨 事〕御達 同日

來る元日年賀登城の節六等官已下麻上下着用の儀先達て
申入置候處直垂所持の向の直垂着用可有之段更_レ御治定
候間此旨申入候也

但衣服御制度相立候迄の清服登城の節已來同様可被相
心得候也

〔東京府〕御觸 同日

一此度金札御貸渡の儀の先達ても御示し相成候通り市中
一同何れも産業の用途を立其分限_二應じ益銘々の職業
を盛_二久の基を可相立様被遊度殊_二日々暮し體の

者ものの只ただ目前まへの業わざののみ心こころを寄よ候まをての業わざも安やすんじ候まを事こと無な
 之これ何なに迄までも難あやま澁ざ可た致ま去さり迎むか産業さんぎょうを起おこし度たく思おも候まを者もの元もと手て無な之これ
 身み元もと薄うすき處ところより止やむ事ことを得えず目前まへの營いさみ致まし候まをので
 立た行ちやうざるの場ば合あひも可た有あ之これ依たて此こ金きん札さつ御おん貸か渡わた相あ成じやう候まを得えば
 何なにれも篤あつと御おん趣しゆ意いの程ほどを辨わへ永えい久きうの産さん業ぎやうを起おこし候まを様やう工く
 夫つまをこらし日ひ夜や勉べん勵れい致まし候まを様やう就つて此こ目め途との振あ合あひよ
 り御おん貸か渡わた相あ成じやう候まを得えば目め前まへの事ことを取とり止とめ且かつ右みぎ金きん札さつを無な益えき
 の事ことも遣つひつふし等らう不ふ致ちやう様やう自じ然ぜん御おん趣しゆ意いを取とり違ちがひ候まをて
 上かみ納のうの期き限げんも至いたり益えき困こん窮きう可た致ま候まを素もとより是これ等らうの事ことの勘かん辨べん
 可た有あ之これ候まを得え共あ尙ま又また精せい々さう相あ心しん得とく可た申まを候まを事こと

一い一般ぱん利り足そ四あ朱しゆの割わり合あひて十じゆヶ月げつ限げんり返へん納のう尤なほ金きん百ひゃく圓げん以上いじやう
 拜はい借あかの分ぶんの相さう當たうの身み元もと證しやう據この品あや可た差さ出し百ひゃく圓げん以下いげん拜はい借あかの
 者ものの月げつ賦ふ返へん納のうの事こと
 但た金きん札さつ通つう用ようの素もとより自じ然ぜんの相さう場ばも順あひ御おん施し行ぎやう相あ成じやう候まを
 得え共あ拜はい借あか并あ上じやう納のうの時ときの金きん札さつの持も前まへもて可た取と扱あ事こと
 一い市ち中ちゆう一い般ぱん望ぼうも隨あひ御おん貸か渡わたの相あ成じやう候まを得え共あ數かず十じゆ萬まん家か竈いざ一い
 時ときも行ぎやう届と候まを様やうの無な之これ且かつ産さん業ぎやうの儀ぎも一い時じも起おこり候まを様やうの儀ぎ
 の有あ之これ間ま敷し且かつ又また一い時じも御おん手ても不ふ被か爲せ届と候まを得えの銘めい々さう篤あつ
 と其その見み込こと立た置お候まを様やう覺かく悟ご可た致ま左さ候まをて追おひ々さう仕し法はふをも相あ立た
 可た中ちゆう候まを得えば其その見み込こもより順あ々さう時とき月げつを逐おひ御おん貸か渡わた可た相あ成じやう

候得バ其心得可致事

一 一般産業又基き候儀ハ勿論ハ候得バ當春以來兵火流離
 即今貧窮無産の者共産業の目途ハ切置一日も立行ざる
 者或ハ五體不具として困窮飢餓ハ迫リ候者可有之右の
 分ハ先以産業の目途を相立候迄の取り繋ぎとして一町
 内何程づ、と御貸し渡し可相成候得バ町役の者精々取
 調早々可申出事

一 假令バ上より是を見れば市中一般ハ皆子あり左候て貧
 窮無産の者ハ幼稚子供の如き者也能く手を付け引立ざ
 れバ皆々餓死すべきハ目前の事也然るハ貧窮成者の稍

もすればあどよするの弊なき能ハ其上利口の者己れ
 が壹人の利を營むものゝ爲め種々の事を申立目前ハ宜
 敷様又相見へ候ても詰りの一般の爲ハあらざる事少
 からむ甚以不宜候申迄も無之候得共町役の者深く此儀
 をわきならめ御趣意の程を辨ハ偏頗の事等無之様可致事
 一 貧窮無産の者へ可憐筋又付引當等無之者と雖も仕法を
 立拜借相免し可申候得共全體晝夜油斷無く相稼候ハ
 格別の事ハ有之間敷候處只一時を心よくするの爲め或
 ハ酒食又ふけり職業を廢し畢ハ貧窮ハ落入候者も不
 少哉又相聞右の通みてハ決て不相濟候條右等の者の篤と

心底相改候のでり御貸渡し無之事
一市中自他の無差別右様夫々委細御諭し有之候得共尙思
かの者よして上意を不辨者拜借の道如何よて可然哉と
途方よ迷ひ無用の雜費等入遣候儀有之哉も難計右の決
て不宜候條其心得可致事

〔太政官〕御布告 十二月廿一日

今般御制度復古の折柄第一御退孝の思食よて來る廿五日
先帝三周御忌辰神祇式を以て於朝中御祭奠同日山陵御參
拜被仰出候事

〔同 官〕御布告 同日

廿三日朝山陵勅使宮大臣三位以上堂上諸侯參拜晝後四位
以下同上諸侯參拜

廿四日朝山陵勅使大宮御參拜晝後女房參拜薙髮參拜

廿五日卯刻於南殿御祭奠山陵行幸

廿六日朝三等官以上徵士參拜廿三日不參の堂上諸侯參拜
晝後黑御所參拜

〔同 官〕御布告 同日

從來泉山よ於て御法會の節參拜の宮堂上を始末々迄御齋
被下候得共向後へ不被下候間參拜の面々末々よ至る迄其
旨可相心得候事

但本文の次第又付各辨當の用意可有之事

〔太政官〕御布告 十二月廿二日

一 來る廿六日より正月三日迄休暇の事

一 四日より御用始又付出勤の事

一 六日七日十一日十五日十六日休暇の事

〔同 官〕御布告 同日

富興行の儀に兼て御禁制有之處近年諸國に於て金錢融通を名とし或の社寺再建等又託し興行致候向も有之趣元來洗季の弊風僥倖の利を以て民心を誘惑するより自然農工商共其職業を惰り往々是が爲又家産を破候者も不少哉

又相聞へ以の外の事又候斯御一新の折柄右様の所業殊々御趣意又相戻り候儀又付更又嚴禁被仰出候事

〔行政官〕御沙汰 同日

酒井徳之助

岩代國若松城御預被仰付別紙郷村高帳の通領知下賜候尙御判物の儀に追て太政官より御沙汰可有之事

南部彦太郎

磐城國白石城御預被仰付別紙郷村高帳の通領知下賜候尙御判物の儀に追て太政官より御沙汰可有之事

安藤飛驒守

安藤對馬守儀先般土地替被仰付候又付爲代地伊達龜三郎
舊領陸中國磐井郡の内別紙郷村高帳の通下賜候尙御判物
の儀の追て太政官より御沙汰可有之候此旨可相達候事

〔太政官〕御布告 十二月廿三日

一 租稅收納の儀の米金とも今年の處の先從來の通相心得
更上土地又相成候分の是迄の私領引付を以取計水害兵
災又罹り候分等の半納或の無納夫々至當の見込を以可
伺出事
一 取締地所高に應じ金札御下げ渡又相成候間會計官へ承
合せ撫恤の道行届候様取計可申事

一月給の御規定の通毎月會計官よて御渡又相成候事
一 知縣事の見込を以申付候小吏の月給其他年中御用途の
失費等の高一萬石又付凡二百兩の見込を以租税金の内
知縣事預り置夫々仕拂勘定書翌年正月中會計官へ差出
可申事

十萬石以上支配縣官員

五等官

權知縣事

御政體又基き諸務を掌る

壹 八

諸務を裁判し決を知事より取り調役以下を指揮す

六等官下

權判縣事

貳人

七等下

調役 三人

八等上

書記 兼調役補 四人

八等下

筆生 貳人

右東京詰の前書官員の内にて交代す

九等上

捕亡 拾人

東京詰

調役 壹人

書記 壹人

右の官員可被仰付候間各藩にて人撰名前早々可届出事

其他門番半番小使等の知縣事の見込を以召抱人數并月給共可相届事

十萬石以下之支配縣官員

六等官上

權知縣事壹人

七等官下

權判縣事貳人

八等上

調役 三人

八等下

兼調役補 四人

九等上

捕亡 拾人

右東京詰の前書官員の内にて交代
其他右同文

東京詰
調役之内壹人
書記

〔太政官〕御布告 十二月廿四日

近來産婆の者共賣藥の世話又ハ墮胎の取扱等致候者有之
由相聞へ以ての外の事ハ候元來産婆ハ人の性命も相拘
り不容易職業ニ付假令衆人の頼ト受無余儀次第有之候共
決て右等の取扱致間敷答ハ候以來萬一右様の所業於有之
ハ御取糺の上屹度御答可有之候間爲心得兼て相達候事

〔太政官〕御布告 十二月廿五日

東京昌平學校並開成學校來己歲正月十七日より御開學相成候間有志の輩ハ兩齋へ願出入學可致候事

入學規則

一入學の儀毎月二七より相限候事

一入學願出の節當人生國住所年齢姓名並支配主人等姓名巨細相認學校へ可申出事

右の通被仰出候事

〔同 官〕御布告 同日

東京住居武士體又ハ町人體よて諸有司へ立入誰殿出入誰

殿内御用杯と相唱へ小大より無限内願筋取扱或ハ公事訴訟の世話賄賂の取次等致居候者往々有之哉ハ相聞不屈至極又候右等の者及見聞候ハ早々可訴出事

〔行政官〕御沙汰 同日

醫學所

以來學校可爲管轄旨御沙汰候事

〔同 官〕御沙汰 同月廿八日

會計官

春來御用多端より付在官の輩拜借の官金不及返上候事但右の外中條三輪等拜借金も不及返上候事從明年ハ官

金拜借の儀ハ不被聞届候無據輩ハ其情實篤と取糺の上
可申出事

右の通被仰出候間於其官取調の上可相達候事

〔行政官〕御達 十二月廿八日

諸府縣ニ於て百姓共訴訟筋難取捌事件往々其府縣の添書
を以て行政官へ及直訴候向も有之候處是等の類以後會計
官租税司へ宛可差出候事

〔太政官〕御布告 同 月

諸國大小の神社神職繼目の儀ハ所部の府藩縣の以印鑑可
願出候其上於神社官許狀相渡尙又心得方相達候間請書調

印可仕事

但勅祭大社神社官直支配の分ハ非此限事

一 遠國邊陲或ハ末々の神職共差向上京難澁の者所部の府
藩縣ニて先承置取約め願出候とも不苦候訴狀等の儀前
同斷の事

但名代人指出し候ても不苦事

一 延喜式神名帳所載諸國大小の神社現存の分ハ勿論の儀
衰替廢絶の向等所部の府藩縣ニて精々取調確定の上可

申出事

一 式外ても大社の分且即今府藩縣側近等も崇敬の神

社（社）は是亦可申出事

〔太政官〕御布告 十二月

在東京の公卿諸侯並諸官の三等官以上節朔參賀として登城可致事

〔同 官〕御沙汰 同 月

軍 務 官

先般病院被取建候處當今未だ難被行儀も有之暫時病院の名目相止め當分軍務官治療所と唱候様被仰出候間此旨相達候事

〔行政官〕御沙汰 同 月

東 京 府

軍務官兵隊市中等よて故障有之其府へ召捕候節其罪狀相添早々軍務官へ引渡可申旨御沙汰候事

〔同 官〕御達 同 月

月給御渡方五等官以上當五月より御減相成有之候處東北平定及び今般還幸被為在候よ付てハ從前減じの分御渡よ相成候間為心得相達候事

〔同 官〕御達 同 月

宮堂上諸侯家來の者共御車寄敷石の邊猥又徘徊致し候趣甚不敬の事に候向後其主人より心得違無之様屹度可申付

事

〔行政官〕御達

十二月

人撰にんせんの至重ちちゆうの要務ようむ且かつ當人たうじんに於おても出處しゅちよの終身しゆうしんの大節たいせつに拘かり不ふ容易りやうい儀ぎに付つ以後いご初はつめて被め爲せ召め候き節せう別べつ紙し離り形かたの通たう當たう分ぶん御ご雇やを以もつて何なに々々へ出あ仕つと被め仰め付せ置お譬たへ辨べん事じへ出あ仕つと被め命めい候きに其その分ぶん課か中ちゆうへ相あ加かへ諸しよ候こう課か又またに府ふ縣けんの課かと十日じふにち或あるひに十五日じふごにち日にちづと轉てん課かし其その才さい能のうを篤とくと相あ試し候こう上うへ其その所しよ長ちやうを以もつて諸しよ官くわん及及び府ふ縣けんの本ほん役やくに被め仰め付せ候き事じ

但た格かく別べつの八はち才さいに不ふ在ざい此この限げん初はつめ撰せんより本ほん官くわんに被め仰め付せ候き事じ

姓名

當分御雇を以辨事出仕被仰付候事

月日

行政官

姓名

當分御雇を以會計官出仕申付候事

月日

知官事

但辨事分課へ相あ加かへ候き例れいに准おじ其その官くわん諸しよ司しの中ちゆうへ相あ加か才さい能のうを試し候こう上うへ適たう當たうの職あ任にん可か申ま付せ事じ

諸官総て此例に准ず

右の通規則被相定候事

〔同官〕御達 同 月

今般養老の典被爲擧八十八歳以上の者へ御扶持被下候處
改正の期於府縣初て御扶持被下又前年死亡の者共毎年
正月中取調可被申出候事

右の通被仰出候間相達候事

〔行政官〕御達 十二月

是迄鐵砲洲又有之外國事務局以後東京運上所と相唱へ候
様改て被仰出候事

但東京府可爲管轄事

〔辨事〕御達 同月

是迄駿河以東十三洲府縣の儀會計官又於て取扱來候處以

後行政官可爲管轄旨被仰出候間此段相達候事

〔釋遞司〕御達 同月

諸官省より御用狀京都へ差立の定賃別紙の通よて日々差
立方幾度も及候て御失費不容易儀又付以來京師へ定
便毎月五十定日と相定六日切を以被差立候間諸官とも精
々念入御用狀相繼め右定日可差出様屹度相心得可中事
但定日七ツ時迄辰の口驛遞司へ可差出事

格別の御用柄非此限

右の通御規定相立候間爲心得申達候事

別紙

覺

東京より
京都迄
一三日限便

仕立飛脚賃
金貳十三兩

但目方五百目迄

宿繼よてい人足六人拂

此賃金十八兩壹分貳朱餘

同
一四日限便

同

金七兩

但右同斷

同人足五人拂

同

此賃金十五兩壹分壹朱餘

同
一五日限便

金七兩

但右同斷

同人足四人拂

此賃金十貳兩壹分餘

同
一六日限便

同

金六兩

但右同斷

同人足三人拂

此賃金九兩三朱餘

同
一八日限便

同

金四兩

但目方五百目以上百目よ付銀貳拾匁の割よて賃銀相
増申候

同人足二人拂

此賃金六兩貳朱餘

同
一十日限便

同
金貳分貳朱

但右同斷百目と付銀十五匁の割よて貨銀相増申候

同人足一人拂

此貨金三兩壹朱餘

右の通御座候事

假名
傍訓
公布
は寫
第二册終

○誤謬訂正

○第一册

○九行丁 (軍防事務) の下(局)を脱す

○廿六行 (結込) の (詰込) の片を誤る

○五十二行 (總督官) の (總督官) の謬り

○六十四行 (忠) の音(ち)の假名を脱す

○六十五行 (程依) の (程能) の誤り

○七十二行 (病證) の (病症) の誤り

○八十四行 (今廿一日) の上(自)の字の衍あり

○百六十八行 (同官) とあるの (太政官) あり

○ 第二册

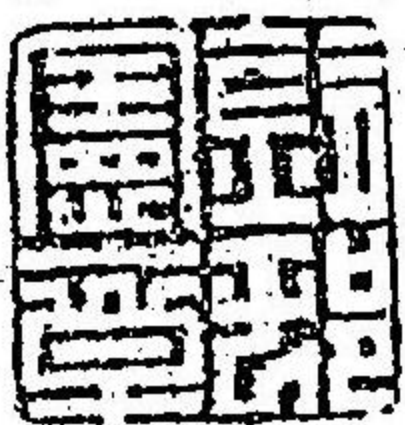
- 廿五丁 (薰齋) の傍訓 (薰齋) の誤り
- 八行 (薰齋) の傍訓 (薰齋) の誤り
- 四十三行 御布告一章 初廿六行と重複
- 四十七行 御布告一章 初廿六行と重複
- 四十五行 (舊貫) の誤り
- 丁二行 (舊貫) の誤り
- 百六十三行 (中上) (中下) の誤り
- 丁初行 (中上) (中下) の誤り
- 百六十六行 (京師) の假名 (京師) の誤り
- 丁六十六行 (京師) の假名 (京師) の誤り

東京芝松本町四番地寄留

堺縣士族

編輯

鈴村憲章



明治八年十一月廿四日版權免許

東京本町四丁目十七番地

御鐸社主

出版人

中山喜錄

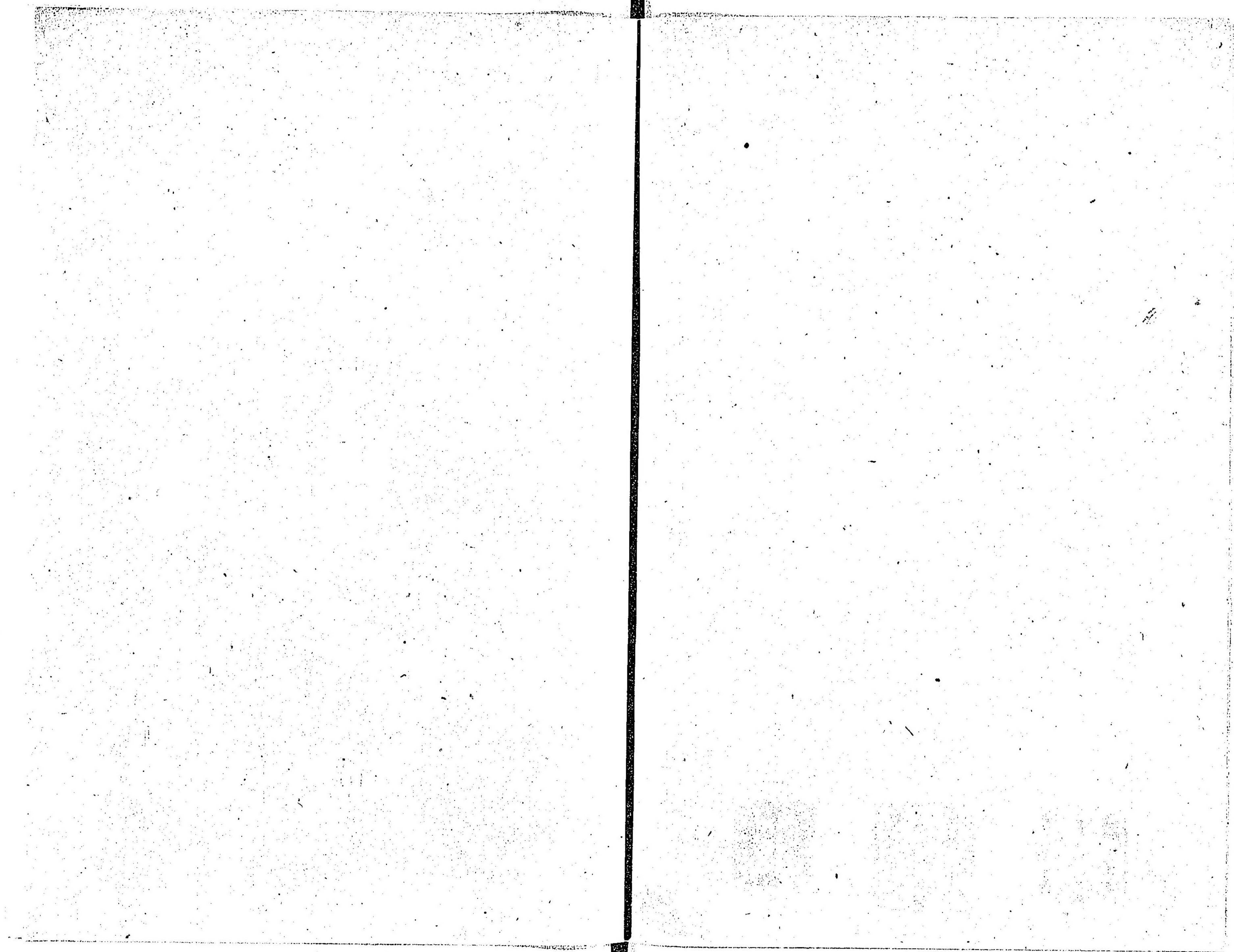


東京中橋大鍛町五番地

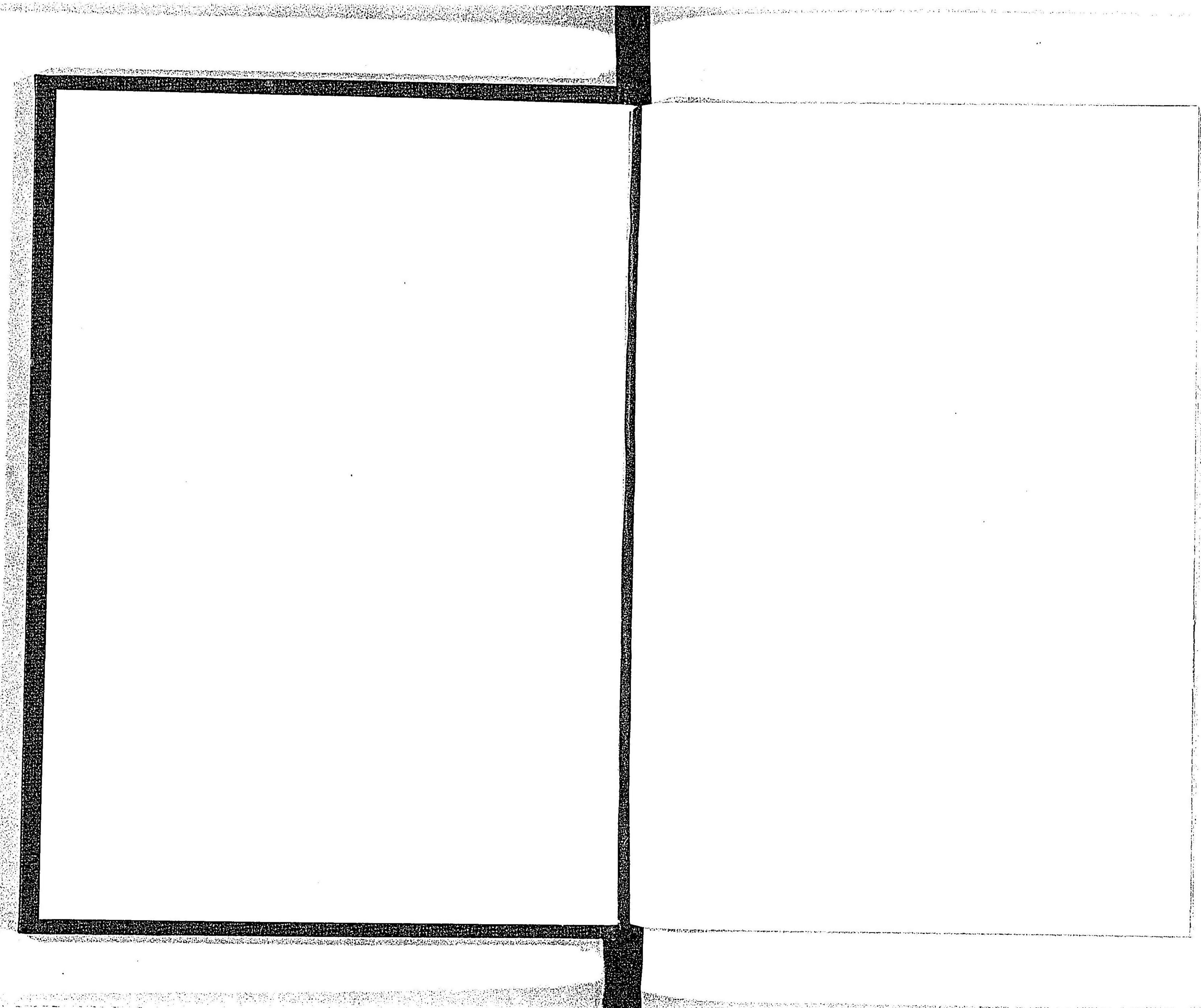
御鐸社理事

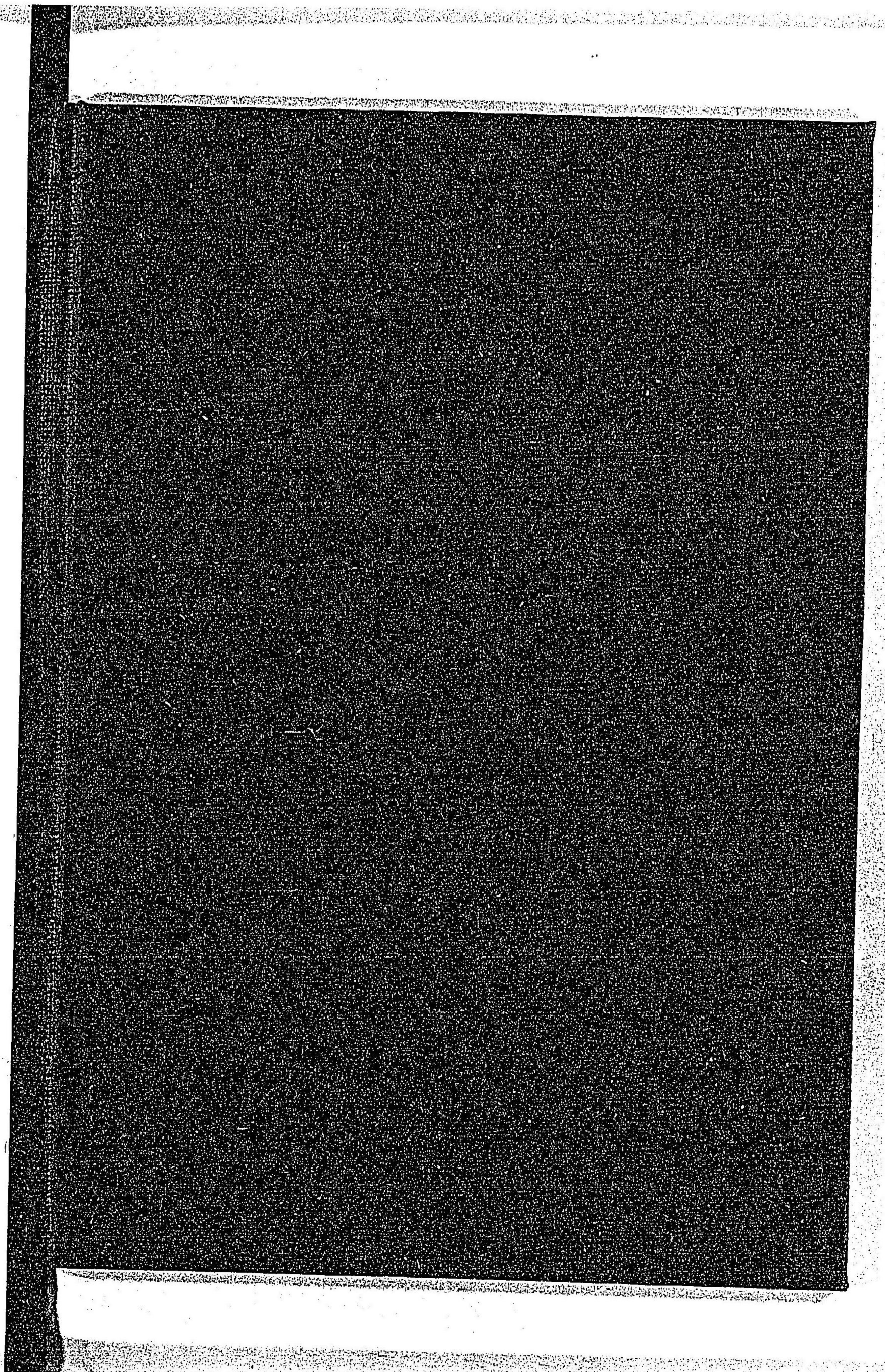
喜谷喜六





チキアQ-1





禁電子式複写

030977-001-4

CZ-3-029

公布の写 (仮名傍訓)

鈴木 憲章/編

M8-14

BBC-0439



